

早稲田大学広報 通号187号

CAMPUS NOW



2009 盛夏号

11 SPECIAL REPORT

「早稲田文化」創造と発信

Part1. Interview 大学が担う文化推進の意義

Part2. 山根基世さん キャンパス内博物館一日探訪

Part3. 文化発信の新しい形を牽引する

Interview 広河隆一

社会に開かれた「早稲田文化」へ 青木保
阿刀田高 野村万作

22 第二世紀へのメッセージ

株式会社東急文化村
代表取締役社長
田中珍彦

24 プロ・ローグ

理工学術院教授 林泰弘

RESEARCH & EDUCATION

研究成果を社会に公開

成長する早稲田のロボットたち

グローバルCOE
「グローバルロボットアカデミア」が
「RTフロンティア」オープン

ロボット研究において世界最高水準を誇る本学が開発したロボットと地域の方々が触れ合える「RT (Robot Technology) フロンティア」が5月21日、西早稲田キャンパス近くに開設されました。「人とRTの共生」を目標の1つとして掲げる「グローバルロボットアカデミア」の研究活動拠点として、一般の方が高齢者支援用やリハビリ支援用のロボットと実際に触れ合える場所を提供。そこからデー



Vサインする情動表出口ロボットEYE

タを取得するなどして、自立支援ロボットの研究開発に役立てていきます。

オープニングセレモニーでは、拠点リーダーである藤江正克理工学術院教授が「ロボットは人の生活にどのようにフィッティングさせていくかが難しい。本屋に立ち寄るように多くの方に気軽に訪れてロボットに触ってもらい、卒直なご意見をいただきたい」と挨拶しました。



歩行支援機COSMAR

読み聞かせブック・リーダー・ロボット
「二宮くん」

北九州キャンパスにある大学院情報生産システム研究科の鎌田清一郎教授が、北九州工業高等専門学校 山内幸治准教授、上海交通大学 趙群飛教

授・朱杰教授との海外連携プロジェクトにより開発した「二宮くん」。機械的な音声ではなく、子供のように、あるいはソフトに優しく、感情を入れて人に読み聞かせてあげたいという鎌田教授の想いから生まれました。「二宮くん」はまだ小学校低学年のため感情は豊かではありませんが、図書館での子供達や介護施設でのお年寄りへの読み聞かせの実現を目指しています。

6月11日には、「ロボット産業マッチングフェアIN 北九州」で公開デモも行いました。



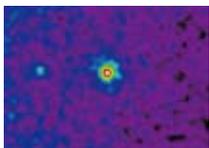
その姿は、薪を背負い本を読む二宮金次郎のよう

RESEARCH & EDUCATION

NASAのウェブサイトにも掲載

フェルミガンマ線宇宙望遠鏡で、新種の「ガンマ線銀河」を発見

理工学術院の片岡淳准教授と広島大学・JAXA・東京工業大学・東京大学・名古屋大学の研究グループは、米国NASAをはじめとする国際共同研究により、新種の「ガンマ線銀河」を2つ発



銀河中心からのガンマ線放射を初めて検出

見しました。ガンマ線は極端に波長の短い電磁波の一種で、目で見える可視光の約10億倍の高いエネルギーを持ちます。このような高エネルギーでの宇宙観測はこれまで困難でしたが、昨年6月に打ち上げられたフェルミガンマ線宇宙望遠鏡の活躍で、激動する宇宙の姿が続々と明らかになりつつあります。今回の「ガンマ線銀河」も、従来よりも数

十倍深い全天探査で初めて見えてきた天体です。

銀河系を含め、多くの銀河中心には太陽の100万倍を超えるブラックホールが存在すると考えられます。新種のガンマ線銀河の発見によりフェルミガンマ線宇宙望遠鏡は天文学の新しい窓を開いたと言えます。

PRIZE

日本とスペインの国際的な文化交流に大きく貢献

入江正之教授、「村野藤吾賞」を受賞

6月1日、理工学術院の入江正之教授(写真:左下)が、廃墟状態となっていたスペイン・カタロニア地方の伝統的
石造民家「マジア(masia)」を修復・再生させた『実験装置/masia2008』(新
建築2008.9掲載・写真上・右下)で、第
22回「村野藤吾賞」を受賞しました。

組積造の壁の祖形を際だたせつ

つ、鉄の架構体を拮抗させ、建築の
初源を住まうことの直感を喚起する
舞台として問い直したことや、また、
大地と永い歴史の中から隆起した壁
とその足下に居る石、赤く錆びた鉄、
黒く磨かれた鋼鉄の共演が、スペイ
ンとの文化交流に大きく貢献したと
評価されました。



UNIVERSITY

岡田卓也氏を顕彰

11号館アトリウムに記念顕彰プレート

本年2月に竣工し、商学学術院・国際
教養学部の特長として学生の活気に溢
れる新11号館5階アトリウムで、岡田卓
也氏(イオングループ名誉会長相談役、
1948年商学部卒業)を顕彰した「岡田卓
也記念」顕彰プレートの除幕式が行なわ

れました(5月28日)。

氏は、本学評議員会長、商議員会長を
歴任、創立125周年記念事業募金委員
委員長として新11号館建設にも多大な
貢献をいただきました。



総長とともに顕彰プレートの前に立つ岡田氏(右)

ACTIVITY

各種講座からツアー企画まで

佐賀県との連携協力が充実

2006年12月に包括連携協定を締結
した大隈重信の故郷・佐賀県との間で、
さまざまなプロジェクトが進行中です。
九州「学びのメッカ」づくり事業として



は、本学教員が現地で、あるいは遠隔
通信により文化講座や生涯学習講演会
を行い好評です。また、大学院公共経
営研究科が同県内で開講する夏季集中
「大隈地域創成講座」には県の若手職
員等も参加し、担当教授の指導のもと
学生のフィールドワークや政策提案が
行われています。

最近では、本学講師が同行する「明
治維新のふるさと佐賀の旅」を3月に実
施。昼は、大隈の生家(写真)や菩提寺

などゆかりの地を巡り、佐賀城本丸歴
史館では大隈の雄弁な総選挙演説を
聞き、夕刻には大隈の活躍やエピソード
を生き生きと伝えるミニ講義を開
催。参加した校友からは、大隈の人間
の深さへの感嘆や、母校の創立者を改
めて見直したとの声をいただきました。

この他にも、佐賀市や唐津市、佐賀
大学との連携も進められており、佐賀
県と本学の交流は、さらに幅広いもの
となっています。



理工学分野での更なる貢献を目指し

新たに2機関と包括協定を締結

東京都市大学共同大学院「共同原子力専攻」を2010年4月に開設予定

4月27日、本学と東京都市大学(中村英夫学長)は、教育・研究活動の交流と連携の推進を目的とした包括協定を締結しました。現在、検討を進めている具体的な取組みは、原子力分野に関する共同大学院「共同原子力専攻」の2010年4月設置、および「未来エネルギー大学院フォーラム」(*)の設立です。

未来エネルギー、原子力工学、加速器・放射線応用を中心とするトップレベルの教育・研究を行う共同大学院とフォーラムとが連動して、研究・開発、人材育成の中心的役割を果たしていきたいと考えています。

(*) 本学と東京都市大学を中心に、慶應義塾・明治・立教などの協力大学による大学連合と企業・官公庁が連携し、エネルギー研究・教育の促進、エネルギー産業の活性化を目指すものです。



調印書を手にした東京都市大学 中村英夫学長(左)と白井総長

JAXA(宇宙航空研究開発機構) 宇宙航空分野における幅広い分野で協力を実施

5月29日、本学は宇宙航空研究開発機構(立川敬二理事長、以下「JAXA」と)、我が国の学術研究、教育の発展及び宇

宙航空科学技術の発展に資するため連携協力協定を締結しました。

これまでJAXAとは、理工学術院を中心とした連携活動が行われてきましたが、宇宙航空分野では社会科学、人文科学などとの学際的協力も不可欠となっており、今回の協定に至りました。

主な連携協力の内容としては、基礎から応用まで含めた共同研究および宇宙理工学以外の分野での連携を予定。前者では現在、H-IIAロケットで打上げ予定の金星探査機と相乗りする小型副衛

星(WASEDA-SAT2)の打上げに向けた共同作業や、国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」に、本学が開発研究中の大型実験設備を設置するというプランが進行中。その他にも新たな共同研究をスタートさせます。

また後者では、本学の附属高校を交えた形での宇宙教育に関する協力を行う他、一般教育活動での協力等、これまでになかった幅の広い連携について、新たな枠組みを検討していきます。



握手をかわすJAXA 立川敬二理事長(右)と白井総長

ACTIVITY

早稲田大学芸術功労者

三木卓氏講演会開催

「早稲田大学芸術功労者」(2009年4月授与)で校友の作家、三木卓氏(写真)を招き、5月28日、本学小野記念講堂にて講演会が開催されました。

第一部では「わたしの修行時代」と題し、現代文学に重い位置を占める氏の「詩は緊張であり、例えば高飛び込み」

など創作の原点をめぐってのお話、さらに氏の代表作を話題の中心に、文学の面白さが語られました。

第二部では、文芸評論家富岡幸一郎氏との対談が行われ、第33回谷崎潤一郎賞を受賞した著書『路地』をめぐって数々のエピソードが披露されました。鎌



倉は傷ついた人が傷を癒すために集まってくる魂の避難場であると感じ『路地』を書いた、当初『鎌倉』の題で出そうとしたが観光書のようなと言われ変更した、などの話に多くの聴衆が興味深く聞き入っていました。

貴重な文化資源を社会に還元するために

各博物館で新展示室・企画展示公開

會津八一記念博物館で「富岡重憲コレクション」通年公開

會津八一記念博物館では、「富岡重憲コレクション」を通年にわたって公開するための展示室が開室されました。日本重化学工業株式会社創業者である富岡重憲氏（1896-1979）の蒐集品が中心とな

り、重要文化財・重要美術品を含む日本や東洋の古美術品が公開されます。

5月12日～6月29日は、富岡重憲氏の蒐集品を総覧できる展覧会が開催され、7月4日～9月14日（ただし8月4日～31日



休館)には新石器時代仰韶期から清代までの中国陶磁コレクションが展示されます。

日中文化交流を記念して、演劇博物館で「上海演劇の精華」展公開

6月1日～30日、坪内博士記念演劇博物館にて、上海文化芸術檔案館との共催による「上海演劇の精華」展が開催されました。この企画展は、上海市文化芸術檔案館との長年の交流および坪

内逍遙の生誕百五十年を記念したものです。

上海市文化芸術檔案館秘蔵の資料が日本初公開され、これまで日本で紹介されることのほとんどなかった上海

演劇博物館企画展示室にて



演劇を、体系的に網羅する貴重な機会となりました。

「夜回り先生」、魂のメッセージ

薬物乱用防止「水谷修氏講演会」開催

6月12日、薬物乱用防止活動の一環として「夜回り先生」水谷修氏（写真）を招き大隈講堂にて講演会が開催されました。多くの学生、教職員が会場に駆けつけ、超満員の中での講演となりました。

「夜回り先生」として有名な水谷氏は、深夜の繁華街のパトロールを通して、多くの若

者たちとふれあい、非行防止、薬物汚染拡大の防止、更生に努めています。

なぜ薬物に手を出してはいけないのか、薬物はどのように人を破滅に追いやるのか、その依存性などについて「夜回り」の実体験を通した迫力あるお話が展開されました。



学生からは、「親から授かった大切な生命を薬物で失ってはいけないと実感した」、「大麻・麻薬問題について自分ができることはないか、改めて考える良い機会になった」などの感想が多く聞かれました。

早稲田の国際交流、全部魅せます

ワセダ・グローバル・フェスタ2009

6月19日・20日、国際コミュニティセンター開設3周年を記念し、国際交流関連の学生サークルや学内機関合計22団体が集結したインターナショナルなお祭り「ワセダ・グローバル・フェスタ



外国人学生日本語の歌コンテスト決勝大会(大隈ガーデンハウス2階)

2009」が開催されました。

各サークルや団体のブース出展企画では、食や留学等をテーマに日ごろの活動を紹介。外国人学生による日本語の歌コンテストの決勝戦では、予選を勝ち抜いた8組が熱唱した結果、『三日月』を披露したアジア出身ペア「Asian Beauties」が優勝しました。

大隈大講堂でのフィナーレ・ショーで



英会話レッスン体験コーナー(大隈ガーデンハウス1階)

は、特別ゲストで国際教養学部在籍のシンガーソングライター「JYONGRI」が新曲を披露し、会場は大いに盛り上がりました。2日間でおおよそ2,500人もの参加者を集め、「早稲田から世界へ、世界から早稲田へ」の決意を新たにして幕を閉じました。



一貫教育の充実に向けて

附属・系属校の新展開、着々と準備が進行中

本学では高等教育と中等教育との連携による一貫教育を進めるため、附属・系属校の拡充、連携強化を図っています。現在の附属・系属校（下表）の陣容に加え、2010年4月には下記3校の新たな展開が予定されています。各校とも準備を着々と進めており、学校説明会等も順次開催中です。

高等学院に中学部開校

本学の附属校では初めてとなる中学部を開校します（設置認可申請中）。定員は1学年120名を予定、1クラス30名の少人数教育を行います。また、高等学院と連携して中高一貫教育にふさわしいカリキュラム

を準備中です。なお、新たなスタートに合わせて新校舎の建設も進んでいます（2010年春竣工予定）。

URL <http://www.waseda.jp/gakuin/chugaku/>



新校舎完成予想図

早稲田佐賀中学校・高等学校が開校



学園完成予想図

大隈重信の生誕地・佐賀県の唐津市に、新しい系属校として男女共学で開校します。「唐津から世界に貢献するリーダーを育てる」を目標に、学際的な総合力の育成や国際交流体験、地域との交流などさまざまな仕組みを構築中です。定員は中学校が1学年120人、高等学校も開

校時は120人ですが、中学からの内部進学者を迎える3年後は高校段階からの入学者と合わせて240人の定員となります。校舎は来年1月末、学生寮（八太郎館）は2月中旬完成を目指しています。

URL <http://www.wasedasaga.jp/>

早稲田摂陵中学校・高等学校が男女共学化

昨年4月の系属化に続き、来年度からは男女共学をスタートさせます。女性教育を古くから重視してきた本学の理念を受け継ぎ、男女が共同で参加できる社会を支える人材を育成することを目指します。

現在、校舎の建設・改修とともに、全国から集う生徒が安心して生活できるように学生寮の建設を進めています（2010年春竣工予定）。

URL <http://www.setsuryo.ed.jp/>



系属・共学化後の制服・ユニフォーム

早稲田大学附属・系属校（2009年度）

種 別	学 校 名	所 在 地
附属校（大学と設置法人が同じ）	早稲田大学高等学院〔男子校〕	東京都練馬区
	早稲田大学本庄高等学院〔共学校〕	埼玉県本庄市
系属校（大学と設置法人が別）	早稲田実業学校（初等部・中等部・高等部）〔共学校〕	東京都西国分寺市
	早稲田中学校・高等学校〔男子校〕	東京都新宿区
	早稲田渋谷シンガポール校〔共学校〕	シンガポール
	早稲田摂陵中学校・高等学校〔男子校〕	大阪府茨木市



知名度・規模にこだわらず、各自にあった優良企業研究を

2008年度就職状況とキャリアセンターの就職支援について

「売り手市場」の中で

昨年度の就職戦線は、「空前の売り手市場」ともいわれ、民間企業就職希望者に対する求人数を推計した「大卒求人倍率」（リクルートワークス研究所調査）は、前年度に続き2.14倍となりました。単純に考えて学生1人に対し2.14社の求人があったということです。確かに、企業の求人意欲は高く、早いペースで採用活動が展開され、複数の採用内定を獲得する学生も少なくありませんでした。

2008年9月、2009年3月卒業の学部生の進路報告を集計すると、進路報告者9,582人のうち就職6,635人（69.2%）、進学1,785人（18.6%）。また、大学院生（修士課程）の進路報告者2,626人のうち就職した者は1,900人（72.4%）となっています。就職先を企業別で見ると、大量の採用があったメガバンク等の金融機関、大手メーカーが目立ちますが、学生の就職先は全体で2630社におよび幅広くさまざまな業界に進出しています（進路状況の詳細は下表参照）。

世界的不況と求人の冷え込み

順調だった求人状況は、9月のリーマンショック以来の世界的な不況で一変しましたが、2009年春卒業する学生の就職活動は既にピークを過ぎており、前述のような高い就職率となっています。しかし、一部の企業の突然の業績悪化、倒産等により、「採用内定取り消し」が社会問題となり、早稲田大学においても学部生10人、大学院生4人（いずれも学生の申告による）が内定取り消しとなりました。

また、マスコミ報道では、現在の採用状況について「就職氷河期の再来」とも伝

えられましたが、来春2010年3月卒業者の「大卒求人倍率」は、1.62倍と推測されており、前年からの落ち込みは大きいものの、近年の求人ブームが始まる前の2006年の水準で、就職氷河期の底であった2000年の0.99倍に比べれば、氷河期というほどの厳しい状態ではありません。内需型の企業では求人増加させているところもあり、学生の売り手市場が続いたことで、十分な採用活動ができなかった中堅・中小企業の中には、優秀人材確保のチャンスととらえる傾向もあります。企業の知名度や規模にこだわらず、選択肢を広げれば、学生が自分にあった優良企業の内定を獲得することが可能な状況であると考えられます。

就職支援について

キャリアセンターでは、年間を通して多くのキャリア形成支援イベントを開催する他、これまで以上に就職活動中の学生の支援に取り組んでいく予定です。本年もすでに400社に及ぶ各種優良企業を直接キャンパスに招き、学生との接点を強化しています。また、キャリアセンター・スタッフによる学生の個別相談も行っており、昨年度はのべ7,787人の相談がありました。

就職活動がうまくいかず悩んでいる学生がいましたら、キャリアセンターに相談するようご紹介ください。

2008年度全学就職者数 企業別ランキング

順位	企業名	合計(人)	男	女
1	(株)みずほフィナンシャルグループ	146	89	57
2	(株)三菱東京UFJ銀行	106	46	60
3	(株)NTTデータ	70	51	19
4	(株)日立製作所	69	56	13
5	東京海上日動火災保険(株)	68	33	35
6	キャンノン(株)	64	57	7
7	ソニー(株)	63	56	7
7	トヨタ自動車(株)	63	50	13
9	富士通(株)	60	47	13
10	日本電気(株)	59	43	16
11	(株)三井住友銀行	58	33	25
11	日本生命保険(相)	58	32	26
13	野村證券(株)	54	43	11
14	(株)損害保険ジャパン	51	36	15
15	東京都職員I類	50	27	23
16	日本放送協会	48	33	15
17	本田技研工業(株)	44	40	4
18	日本アイ・ビー・エム(株)	41	27	14
19	国家公務員I種	40	30	10
20	大和証券(株)	39	28	11
20	アクセンチュア(株)	39	29	10
22	(株)東芝	38	26	12
23	三菱電機(株)	37	34	3
23	東日本旅客鉄道(JR東日本)(株)	37	30	7
25	大日本印刷(株)	36	18	18
25	(株)野村総合研究所	36	33	3
27	特別区(東京23区)職員	35	19	16
28	第一生命保険(相)	34	23	11
28	三井住友海上火災保険(株)	34	22	12
28	アビームコンサルティング(株)	34	23	11
31	三菱重工業(株)	33	26	7
31	(株)電通	33	23	10
31	国家公務員II種	33	18	15
34	(株)リクルート	32	15	17
35	シャープ(株)	31	25	6
36	(株)りそな銀行	29	20	9
36	三菱UFJ信託銀行(株)	29	13	16
38	東京電力(株)	28	21	7
39	サントリー(株)	27	17	10
39	三菱商事(株)	27	21	6

2008年度進路状況(学部)

(進路報告率 94.9%)

進路報告者	就職	進学	留学等	資格試験受験	その他、進路未定等
9,582人	6,635人	1,785人	185人	295人	682人
比率/報告者	69.2%	18.6%	1.9%	3.1%	7.1%

2008年度進路状況(大学院)

(修士課程修了者のみ。進路報告率 89.5%)

進路報告者	就職	進学	留学等	資格試験受験	その他、進路未定等
2,626人	1,900人	229人	15人	205人	277人
比率/報告者	72.4%	8.7%	0.6%	7.8%	10.5%

本学の資金運用の方針と現状について

米国サブプライムローン問題に端を発した昨秋以降の世界的金融危機を背景に、このところ新聞紙上等で「大学の資金運用」が話題になっています。そこで本学の資金運用の方針と現状についてご説明します。

1. 本学の資金運用の歴史と背景

資金運用の対象となる資金は、奨学金、研究助成および国際交流などのための第3号基本引当資産、施設整備資金等引当資産、退職給与引当資産、特定目的引当資産などの主に各種引当資産として保有しているものです。その資金運用による運用収益（運用果実）は学内給付奨学金、研究助成、国際交流など教育研究環境の充実に有益に使われています。

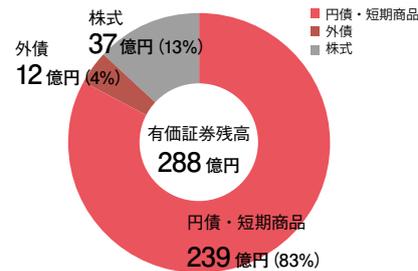
本学の資金運用の歴史は長く、1991年7月には「資金運用内規」を策定しました。当時は、日本の長期国債（10年債）の金利は6%近辺と高く、国内債中心のシンプルな資金運用が可能で、取立てそれ以上のリスクをとる必要はありませんでした。しかし、1990年の日本のバブル崩壊以降の“失われた10年”のデフレ時代に金利は急低下し、現在でも10年国債でおおむね1%台（2003年6月一時0.435%）という歴史的な低金利局面が続いています。こうした状況下、2000年以降は、1991年頃購入した高金利の長期国債が次々と満期償還を迎える一方、償還資金は低金利での再運用を余儀なくされました。この頃から本学では、金融機関から経験豊かな資金運用の専門家を採用し、国際分散投資による収益向上を目指した本格的な資金運用を開始しました。

2. 有価証券ポートフォリオ（運用資産構成）の推移

10年前の1999年3月末の有価証券残高は288億円で、うち円債・短期商品（MMF、CP等）が239億円（構成比83%）、外債12億円（4%）、現物寄付を主とした株式が37億円（13%）と非常にシンプルでリスク管理しや

有価証券残高

1999年3月末



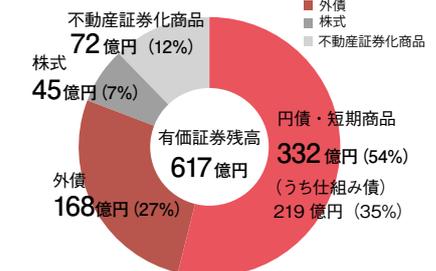
すいポートフォリオでした。その後、日本の歴史的な低金利の中では収益維持が難しくなったため、内外金利差に着目し、5～6%クーポンの米国10年国債を中心とした外債投資を本格的に開始し、徐々にカナダ・オーストラリア・英国などの先進主要国の国債などに分散した外債投信、不動産証券化商品および主要先進国政府機関・国際機関が発行体の仕組み債などリスクリターンバランスを考慮しつつポートフォリオの多様化・分散化を図ってきています。

2009年3月末の有価証券残高は617億円で、うち円債・短期商品（MMF、MRF等）が332億円（構成比54%）、外債168億円（27%）、株式45億円（7%）、不動産証券化商品72億円（12%）です。

3. 過去5年間の運用実績と収益の使途

1990年のバブル崩壊後は、銀行の倒産など預金さえ安心できない時代でしたが、ようやく2005年4月にペイオフ解禁ができるほど金融環境が安定してきたため、銀行預金から債券投資に資金シフトし、運用収入は大きく伸びました。2004年度から2008年度までの直近5年間に実現した有価証券運用収益は123億円にのぼり、この間リスクを取らずほぼゼロ金利の銀行預金に置き

2009年3月末



てあった場合と比較すると大きな運用成果だったと言えます。

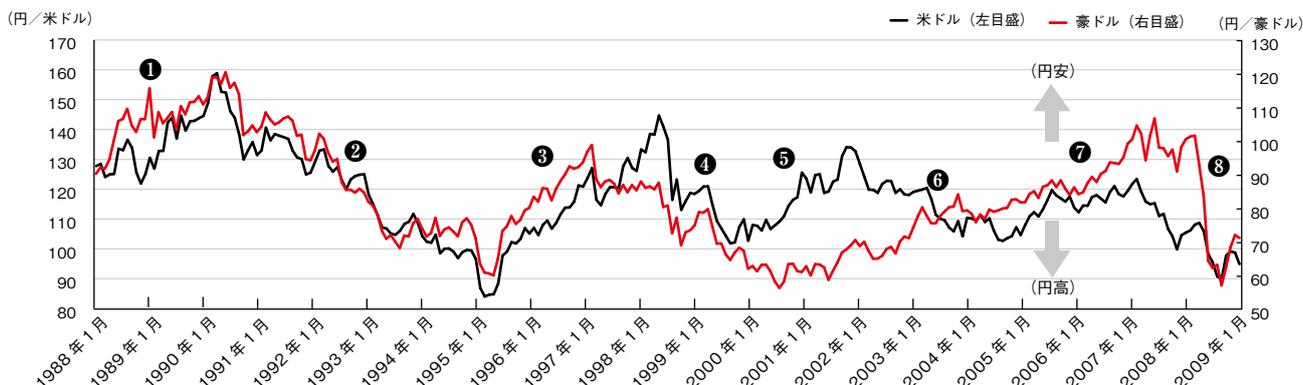
この運用果実は、学内給付奨学金に45億円、研究助成に5億円、国際交流に4億円、その他の大学諸事業に69億円など教育研究環境の整備・充実に有益に使われています。特に、運用収益の一部を原資に2007年度に新設された「創立125周年記念奨学金」は、学部で5億円、大学院で1億円の合計6億円の大型給付奨学金で、従来のような大学一律の奨学金ではなく各学部・大学院の実情に即した31種の奨学金として誕生しました。

本学では、この他にも大学や校友会などによる各種奨学金制度の充実を図ってきたことから、現在、国内大学有数の学内給付奨学金制度を有し、2008年度には学生約7,200人に対して総額22億4,700万円の奨学金を支給しました。今後とも一層充実させていきたいと考えています。

4. 運用方針とリスクマネジメント

資金運用には当然リスクが伴い、リスクを取らなければリターンは望まれません。重要なことはリスクとリターンのバランスをどのように考えるかということです。その前にまず、リスクについて触れたいと思います。リスク

為替レート20年間 (1988年～ 2009年)



は大きく分けて「信用リスク」と「市場リスク (金利変動、流動性、為替変動など)」がありますが、信用リスクは最優先で回避すべきであり、市場リスクについては、各種運用商品のリスクリターンを分析して許容範囲 (許容度) を図りながら、大きなリスクにならないようにマネジメントしていきます。

(1) リスク要因

① 信用リスク (元本リスク)

信用リスクは、債券で言えば発行体に元利息返済能力があるかどうかのリスクです。債券の金利が高く魅力的でも、万一、倒産した場合には、元本が毀損しますので最優先で回避すべきリスクです。特に外債投資をする場合には、海外企業の情報を的確に把握することは本学の体制では難しいため、発行体については原則として米国、英国、ドイツ、フランス、ノルウェー、スウェーデン、オーストラリアなど主要先進国の政府および政府機関あるいは世界銀行、欧州投資銀行などの国際機関に限定しており、元本毀損リスクを極力抑制しています。

② 市場リスク (金利変動、流動性、為替変動など)

市場リスクのうち、金利リスク (= 債券では金利上昇は価格下落を意味する) および流動性リスクについては、本学の債券運用が期限前に途中売却しない満期保有目的を前提にしているため、満期償還時あるいは早期償還時に額面

100%で償還されることで回避します。従って、本学では為替リスクを取って、リターン向上を目指しています。

上記グラフは、米ドル、豪ドル市場の1988年～2009年までの約20年間の推移を示しています。概観すると①最初の2年間円安、②5年間円高、③3年間円安、④2年間円高、⑤2年間円安、⑥3年間円高、⑦3年間円安、⑧今回の2007年半ば以降は円高となっていますが、今年2月以降は、円安が進行しています。このように為替相場は、円安局面と円高局面が循環的に繰り返され、その間の為替変動率は、米ドルで20%～70%、豪ドルで30%～90%と高いものになっています。なお、豪ドルは米ドルに比較して相対的に市場規模が小さいため、変動率はより大きくなっています。従って円高局面で一時的に評価損が生じて、時間さえあれば回復あるいは評価益に転じる可能性が高く、5～10年間の長期的視点に立てば、為替リスクはかなりの程度抑制できます。“運用の世界”では、長期投資で現金化を急がないことが最大のリスクヘッジでもあります (本文中の数字はグラフの該当箇所と対応しています)。

(2) 運用方針

有価証券運用をしている限り、市場変動に伴うリスクをすべて回避することは不可能です。リスクマネジメントの要諦は、①リスクとリターンとのバランスをどのように取るか
②運用資金の性格は何かということです。
5年～10年の長期的視点でハイリスクを

取れば、途中の下落局面はあっても市場回復により最終的にはハイリターンになる可能性が高くなります。この例として挙げられるのは、米国ハーバード大学のハイリスク・ハイリターン型の資金運用戦略です。同大学のホームページなどによると個人を中心とした寄付金の基金残高が約3兆5千億円あり、その運用ポートフォリオは原油・鉱物資源・穀物などの商品、ヘッジファンド、プライベートエクイティ (ベンチャー投資など)、株式、不動産 (山林を含む)、債券などかなりバラエティーに富んだ国際分散投資を進めており、2004年～2008年会計年度の5年間の平均年間運用利回りは17.6% (5年間で元本約2倍) にもなっています。こうして基金に蓄積された運用果実は、市場変動にかかわらず、毎年一定額が安定的に大学会計に繰り入れられます。今回の金融危機で巨額な評価損を抱えたものと思われそうですが、それでも過去の運用収益の範囲内と推測されます。今後、市場の回復を待ちながらも長期投資の運用戦略の見直しがあるかどうか注目されるところです。しかし、同大学も授業料など経常収入は年間の経常費用に充当するため、ローリスクの預金、短期国債 (Treasury-bill 3カ月物) など安全な資産で運用しています。このように資金の性格も考慮したうえでの運用方針が重要となってきました。一方、ローリスクの運用はローリターンに帰結せざるを得ません。

今回の金融危機により市場金利が低下したため、当面は厳しい運用環境が予想されますが、本学の運用の基本方針は、債券中心による3～4%程度の運用を目指した

ミドルリスク・ミドルリターン型の資金運用です。毎年、奨学金給付などのための定期収入が必要であり、株式によるキャピタルゲイン狙いよりも債券によるインカムゲイン（利息収入）中心の運用が主体とならざるを得ません。また、日本の大学の収入の大半は授業料であり、その資金の性格からハイリスク・ハイリターン型の資金運用は相応しくないと考えています。要は、どのような運用方針で臨むのかは、その大学の運用哲学、運用の歴史・ノウハウ、リスク許容度、資金性格など運用への理解度、認識度で異なり、一概にどれが良いというものでもなく、また、単純にリターンだけを比較しても意味がありません。

なお、他大学で通貨スワップなどデリバティブ取引による巨額損失の報道がありました。これは収益拡大を目的として想定元本を何倍にも膨らませるといったレバレッジを掛けたデリバティブ取引でリスクリターンを考慮した資金運用とはとても言えず、投機と言わざるを得ません。本学ではこうしたデリバティブ取引、CDS（クレジット・デフォルト・スワップ）およびCDO（債務担保証券）などは行っていません。

デリバティブ取引自体はリスクヘッジに使えば極めて有効です。例えば、住宅ローンで固定金利型または変動金利型を選択出来たり、海外でクレジットカードを使うことができるのも銀行やカード会社が金利スワップや為替先物市場などでリスクヘッジすることが可能だからです。しかし、前述のようにレバレッジをかけた収益拡大策に使うとリスクの高いものになります。要は、デリバティブ取引自体が危ないのではなく、使い方に問題があるわけです。

5.2008年度有価証券運用実績

(1) 運用収益および期末評価損益

運用対象となる各種引当資産などは2009年3月末現在626億円です。これに現預金263億円を加えた889億円が金融

資産の合計額となります。各種引当資産にはそれぞれ引当目的があり、現預金の263億円が事実上の運転資金などとなっています。

各種引当資産などで保有する有価証券残高は617億円で、2008年度運用収益は28億円、運用利回り4.3%でした。なお、昨秋以降の“100年に一度”といわれる世界的な金融危機に伴う急激な円高、株安で2009年3月31日現在の上場されている有価証券の評価損は、株式で6億円、債券（為替）で22億円の合計28億円となっています。しかし、これら有価証券は短期売買目的の運用ではなく長期保有目的で運用しているため、当該評価損は充分回復可能なものであり、実損につながる危険性はほとんどないと言えます。また、同評価損の有価証券残高に対する比率は、4.5%と比較的軽微なものに止まっています。

なお、今回の2008年度決算から不動産証券化商品および複合金融商品について、「貸借対照表の注記7(1)有価証券の時価情報」の欄外に注記することとしました。いずれも非上場の有価証券であり「時価」と言えるものはありませんが参考までに記載したものです。

(2) 不動産証券化商品について

不動産証券化商品とは、不動産賃貸業務を行う特定目的会社（Special Purpose Company 以下SPCという。）への優先出資証券であり、SPCが不動産賃貸から得た収益を本学が出資に伴う配当金として受け取るもので、当該商品への投資額は72億円です。非上場のため時価はありませんが、本物件に融資している銀行団（幹事行）による2008年12月1日現在の不動産鑑定評価額に基づく当該商品の評価額は195億円です。

(3) 複合金融商品（仕組み債）について

有価証券残高617億円には、複合金融商品（いわゆる仕組み債）が219億円含まれています。仕組み債といっても発行体とのオー

ダーメイド商品なので、条件は千差万別であり一概にリスクが高いとは言えません。本学の場合は一例で言えば「期限前償還条項付きパワーリバースデュアルカレンシー債（早期償還時元本=円で受取、利金=円で受取）」というものでほとんどが30年債であり、利払日に一定の為替水準であると円100%で早期繰上償還されます（2～3年間で早期償還を想定）。当該債券には為替リスクや金利リスクをヘッジするためのスワップ契約が内包されていますが、この契約は発行体と金融機関との間の契約であり、発行体である主要先進国の政府機関、国際機関などが債務不履行となる可能性は考えにくいと、本学に影響することはありません。

当該複合金融商品を証券会社などの提示する「参考価格」で試算すると、その合計額は、138億円となりますが、この「参考価格」は、満期保有目的を前提とした場合の「合理的に算定された価額」とするには相応しくないと判断されるため、当該複合金融商品残高を「時価のない有価証券」に含めて表示しています。

証券会社が提示する「参考価格」は、言わば今すぐ売却しなければならない場合の清算価格（投げ売り価格）を意味していますが、本学の資金状況は投げ売りしてまで資金化が必要な状態ではなく、当該金融商品が満期保有目的であること、毎年の利払日において一定の為替水準であれば、債券は円貨100%で早期繰上げ償還される条項が付与されていること、および発行体は主要先進国政府機関、国際機関などで信用リスクはほとんどないことから当該債券の元本毀損リスクは極めて低いと考えられます。

今後とも、本学は教育研究環境の一層の整備・充実を図るべく、リスクマネジメントを徹底し、引き続きミドルリスク・ミドルリターンの慎重な資金運用を行っていく方針です。

（財務部）

文化発信の拠点 大隈記念講堂

早稲田大学の創立者である大隈重信の没後、生前の業績を記念して1927年に建てられた「大隈記念講堂」。1階席と2階席との間に柱がない、当時としては画期的な構造で、視聴に関する最新の科学的効果も取り入れられ、現代建築の模範となりました。設計は、本学教員であった佐藤功一・佐藤武夫（デザイン）、内藤多伸（構造）、黒川兼三郎（音響）と当時の錚々たるメンバーによるもので、2007年には国の重要文化財に指定されました。

講堂では、多くの学会やシンポジウム、講演会が行われ、文化発信の拠点として地位を確立。演劇ができる構造だったこともあり、第一線で活躍する芸術家や校友の協力により、芸能活動の場としても親しまれていったのです。

そして2007年、最先端の早稲田文化を内外に情報発信し続けるために大改修が行われ、新しい姿に生まれ変わりました。新たな映像設備や情報通信技術も導入され、従来にも増してその役割は大きくなっています。

 Special Report

「早稲田文化」 創造と発信

大学が所蔵する文化資源を教育研究に有効に活用するとともに、広く社会に公開することは本学の大きな使命となっています。「早稲田文化」を創造し、世界に向けて発信する意義と新たな取り組みについてお伝えします。

大学が担う 文化推進の意義

2007年に設置され、学内外に向けた文化発信の中心的な役割を担う文化推進部。
発足の経緯と目的、推進事業、今後の展望などについてお話を伺いました。



文化推進部部长
文学学術院教授
瀬戸直彦

Profile

せと・なおひこ
早稲田大学第一文学部卒、パリ第4大学人文科学研究科オック語文学語学研究課程博士課程修了。主な研究テーマは中世フランス抒情詩の解釈と校訂。



文化推進部副部長
文学学術院教授
十重田裕一

Profile

とえだ・ひろかず
早稲田大学第一文学部卒、同大学院文学研究科日本文学専攻博士課程終了。主な研究テーマは「占領期検閲と文学との相互関連性の研究」「横光利一を中心とするモダニズム文学の研究」など。

「早稲田文化」を世界に発信。

早稲田のファンが集まる大学でありたい

■ 本学の文化資源を 広く社会へ還元する

——文化推進部はどのような経緯・目的で設置されたのか、お聞かせください。

瀬戸 本学には、多数の文化資源を所蔵する文化機関や図書館、学生部、総務部、総長室、募金課といったさまざまな機関があり、それぞれが独自に文化活動を行ってきました。しかし、一つのベクトルをもって統合的に文化を推進していかなければ、世界へ向けて効果的に文化発信をすることはできません。そこで2007年、創立125周年記念事業における今後の理念の一つに掲げられている「積極的な地域社会への貢献」に基づき、本部事務機構の一つとして「文化推進部」が発足しました。坪内博士記念演劇博物館、會津八一記念博物館、大学史資料センターの3文化機関のまとめ役として、本学の文化情報を一元的に発信することを目的としています。

多元性、多様性に富んだ本学の文化資源について、包括的な視点から、整理・研究・保存および展示を行い、さらに3文化機関のネットワークを構築。図書館とも連携しつつ、積極的に文化情報を世界へ発信し、本学の文化資源を広く社会に還元することが私たちの使命です。ま

た、出版機能を強化し、本学の文化的プレゼンスを高める取り組みも始まっています。

——そのような使命のもと、どのような事業を運営していますか。

瀬戸 まず一つ目は、各種文化行事の企画・実施です。2008年度にもさまざまなイベントを開催しました。

他大学との文化交流事業としては、同志社大学と共催した企画展「早稲田と同志社展—新島襄の弟子たち—」の開催、学生団体との交流としては、早稲田大学交響楽団による「カラヤン生誕100年記念演奏会」の開催、地域との交流としては、本学で多大な功績を残した坪内逍遙と津田左右吉生誕の地、岐阜県美濃加茂市との共催で学生演劇公演を中心とした文化交流事業を行いました。また、埼玉県本庄市においては、当代一流の演者による「本庄早稲田能」を開催しました。

二つ目は、「早稲田大学坪内逍遙大賞」です。この賞は美濃加茂市と交互に隔年で実施しており、文芸をはじめとする文化芸術活動において著しい貢献をした個人・団体を顕彰することを目的としています。第1回の2007年度においては、大賞は本学の校友でもある村上春

樹氏、奨励賞は川上未映子氏が受賞しました。川上氏はその翌年、芥川賞を受賞されています。

三つ目は、文化発信拠点としての大隈講堂、小野記念講堂をはじめとした文化施設の運営管理です。大隈講堂は2007年に改修工事を終え、学生活動の成果発表や教員による研究成果の発表など、文化発信の拠点として生まれ変わりました。また、小野記念講堂も機能性、利便性を高め、「文化活動の成果を発表し、さらに世界の文化と交流を図るためのホール」というコンセプトに適合した施設になっています。二つの文化施設は、それ自体本学にとって貴重な文化資源です。大切に維持・管理しながら、日々新たな「早稲田文化」を創出していかねばなりません。

四つ目は、学術研究書出版制度の運用です。出版機能と情報発信強化の一貫として、良質な学術研究書の出版費用を本学が負担します。昨年度からスタートし、まだ試行錯誤の段階ですが、本学のアカデミック・ステイタスの向上を図ると同時に、学内者とともに博士論文提出者に出版機会を提供しています。

■ 世界中の人々に 関心をもってほしい

——今後の事業の展望をお聞かせください。

十重田 現在、本学の文化資源を統合したデータベースの構築を行っています。学生や研究者の研究に役立つように、収蔵資料をデジタル画像にして各文化施設共通のデータベースを構築し、横断的に検索できるようにしていきます。将来的には、国内外の博物館や美術館が行っているようなデジタルアーカイブを作成し、学外からでも見られる「デジタルミュージアム」の構築を目指します。

——早稲田大学だからこそできる文化推

進とは、どのようなことでしょうか。

十重田 「早稲田文化」のファンを増やし、支援者になってもらうことで、さらに活発な文化発信を行い、社会に還元する。それこそが、私たちにできる文化推進だと思います。忘れてはならないのは、一般の方々だけでなく、在学中の学生たちに「早稲田文化」に触れてもらいたいということです。授業で本学が所蔵する文化資源を直接学んだり、イベントに参加して感銘を受けた学生が、卒業後「早稲田文化」のよき理解者・支援者になるなど、言わば文化発信の相乗効果につながることを期待しています。

大学はいたるところに文化の記憶が刻印され蓄積されています。そういった文化の記憶が訪れた人と共有され、皆さんの心の中で育まれればそれに勝る喜びはありません。そのためにも、まずイベントや展覧会にぜひおいでいただきたく存じます。

——今後、大学が目指すべき文化発信の姿についてお聞かせください。

瀬戸 ファンになっていただいた皆さんに、本学の文化施設やイベントに足を運んでいただきたいのです。海外に目を向けてみてください。ハーバード大学にある美術館には世界中から人が集まり、学生たちがキャンパスツアーを行い文化施設を案内しています。私たちも世界中の人々に関心をもってもらえるような文化発信をしたい。

そのためには、デジタル化と多言語化がキーワードとなりますが、これによって、本学を巣立っていった学生たちが、演劇博物館に掲げられている「世界中の人々が役者を演じている」という銘文（グローブ座）のとおり、「世界」という名の舞台で活躍し、「学生時代に学んだ、あの場所に足を運んでみよう」との思いで、さらなる早稲田の文化を育ててほしい。そういった願いを込めて、これからも一層励んでいきたいと思っています。



2008年12月20日大隈講堂で、早稲田大学交響楽団と文化推進部との共催により行われた「カラヤン生誕100年記念演奏会」。カラヤンは1979年大隈講堂で名誉博士号を受け、早稲田大学交響楽団を指揮した。



2007年10月11日、小泉八雲没後100年と早稲田大学創立125周年を記念し、校友である沢木順さんによりソロ・ミュージカル「YAKUMO 小泉八雲外伝」を公演した。小泉八雲は晩年、早稲田大学講師を務めた。



2008年12月16日、大隈講堂において、1978年岸田國士戯曲賞を受賞した知念正真の戯曲「人類館」の公演が沖縄の演劇集団「創造」により行われた（共催：東京国立近代美術館）。東京での公演は30年ぶり。



早稲田大学坪内逍遙大賞第1回授賞式で、大賞を受賞した本学校友の村上春樹さんと奨励賞受賞の川上未映子さん。



坪内博士記念演劇博物館

建物は、坪内逍遙の発案で、エリザベス王朝時代、16世紀イギリスの劇場「フォーチュン座」を模して設計された。正面の屋根のある張り出しは舞台となっており、建物自体が一つの劇場資料。今もシェイクスピア劇など多くの公演が行われている。舞台正面に記されているラテン語はロンドンのグローブ座入口看板に記されていた言葉で、「Totus Mundus Agit Histrionem」。「全世界は劇場なり」という意味。逍遙が設立当時から世界を視野に入れていたことが分かる。

Part 2

山根基世さん キャンパス内博物館一日探訪

大学に記された文化の記憶をたどって

早稲田大学内にある、数々の文化資源。学内外に発信していくには、その価値を再評価する必要があります。

Part2では、NHK教育テレビ『日曜美術館』を担当したご経験のある、元NHKアナウンサーの山根基世さんをお招きして、坪内博士記念演劇博物館、會津八一記念博物館、大学史資料センター・大隈記念室を各館長・所長がご案内。

早稲田の文化資源の魅力を再発見していただきました。

會津八一記念博物館

早稲田キャンパス正門近くに位置する旧図書館を使って作られた博物館。旧大閲覧室は、中にあった机、椅子を移動させて、優美な常設展示室となった。



大学史資料センター・大隈記念室

記念室に入ると、真っ先に目に留まるのは大隈重信の「ガウン」。1913年の創立30周年式典で初めて着用され、1922年の逝去まで愛用した。



世界中の資料を所蔵する 唯一の演劇専門博物館



「なつかしい！ 学生時代のままで」と山根さん。鉛色になった廊下が重ねた時を語ります

早稲田キャンパスの一角にひっそりと佇む、洋館のような建物。古めかしい扉を開けると、そこには別世界が広がります。坪内博士記念演劇博物館は、その名の通り文学部の創立者・坪内逍遙の手によって1928年に設立されました。逍遙は近代日本文学の先駆者・開拓者であり、特に演劇芸術の向上と発展に尽くした功績は高く評価されています。世界の翻訳劇を紹介しながらも、歌舞伎の研究に熱心だった逍遙は「日本だけでなく、世界中の演劇を研究できる施設を作りたい」と設立を決意。著作集『逍遙選集』の印税を寄贈、広く社会から寄付金を集め、自宅を大学に寄付するなどし夢を実現させたのです。竹本幹夫館長は博物館の最大の特徴をこう語ります。「当館は、日本唯一の演劇専門博物館。さらに、世界を視野に入れた博物館は、演劇の盛んなヨーロッパにもありません」。

所蔵する演劇資料は幅広く、錦絵47,000点、舞台写真20万枚、その他には舞台衣装、仮面、屏風、軸物などがあります。特に近世から現代にかけての所蔵資料は、日本で随一。それらの多くが、設立当時から演出家や俳優の方々からの寄贈品です。中には、演劇界で活躍している卒業生のものも少なくありません。「演博の所蔵品は、大学のものというだけではなく、社会のもの。だからこそ、文化発信をして社会へ還元していかなければなりません。早稲田を支えてくださる社会全体に貢献することが私たちの使命なのです」と語る竹本館長。山根さんは「こんなに貴重で素敵な財産は、卒業生としてさらに多くの方々に宣伝していかなければなりませんね」とあらためて博物館に魅せられたようです。

竹本館長 当館の中で最も著名な展示物は、約47,000点ある錦絵コレクションです。逍遙は晩年、歌舞伎研究の一環として錦絵の収集と整理に情熱を傾けていました。

山根さん 日本が映像時代に入ってから、錦絵の歴史的価値は一層高まっていったのでしょうか。

竹本館長 当時、錦絵はそれほど重要な研究対象として見られていなかったのです。

山根さん 焼き物を輸出する際の包み紙として使われていたんですね。

竹本館長 そうなんです。歌舞伎研究になくはならないものと誰も気付きませんでした。そこに目を付けた逍遙は、先見の明があったんですね。



錦絵
歌川国芳画「積恋雪関扉」（つもるこいゆきのせきのと）この演目は、舞踊劇の大成者である初世中村仲蔵が初演した常磐津の大曲で、舞踊劇の中でも人気演目の一つです。役者絵は、役者の個性がリアルに表現され、舞台のイメージを人々に鮮明に伝えることができます。



逍遙の浪曲語りを聞くことができる、映像・音声アーカイブコーナー。演目は、自らが翻訳した「ハムレット」。「男性と女性の声を使い分けてますね。拍手！」



演劇や映画の書籍・雑誌が読める閲覧室。著名な演劇関係者や文化人も訪れるそう。「昭和30年代の『キネマ旬報』が読めるなんて」

message

演博だからこそできる
実験的公演を目指して

竹本幹夫館長（文学学術院教授）

当館の夢は、独自の舞台を建設して公演することです。採算にこだわらざるをえない演劇興行では実験的な挑戦がなかなかできません。自前の舞台上、古典演劇から現代演劇に至るまで、演劇技術を試行したり、過去の作品を復元して公演するなど、実験研究の場を作りたいのです。実演の現場で当館の資料を使って文化発信し、演劇文化に一層の貢献をしていきたいとも考えています。

写真＝金子 悟

Profile やまね・もとよ

山口県生まれ。1971年、早稲田大学第一文学部卒業。同年、NHK入局。美術番組・旅番組・ニュース「ラジオ深夜便」など幅広く担当。現在は元NHKアナウンサーと共にLLP（有限責任事業組合）「ことばの社」を設立。定期朗読会や子どもたちの言葉を育てる活動を精力的に行っている。

実物に触れモノの本質を学ぶ 會津八一が託した思い



玄関ホール、「明暗」の前で博物館の歴史について大橋館長からお話を聞きます

大橋館長 博物館は今年で開館11年目と新しいのですが、この建物自体は大正時代に建てられた早稲田屈指の歴史をもつ貴重な文化財なんです。とくにこのホールは建築当時の雰囲気を残しています。

山根さん 「明暗」の絵とマッチしていますね。

大橋館長 元総長で日本美術院評議員であった高田早苗が「早稲田の図書館のために描いてほしい」と横山大観と下村観山に相談して合作が実現したんですよ。

山根さん 旧図書館だったこの空間をどのような博物館にしたいと思われたのですか。

大橋館長 展示作品だけではなく、歴史的な空間そのものも堪能できる博物館にしたいと考えています。

早稲田で最も多くの学生が通う、早稲田キャンパス。そのメイントリート沿いに位置するのが會津八一記念博物館です。山根さんは、玄関ホールに立ち、横山大観・下村観山共作の壁画『明暗』を見て、「早稲田にこんな優美な空間があったなんて！私は学生の頃、この壁画を見たことがありませんでした」と驚いた様子です。

この博物館のコレクションは、かつて、會津八一をはじめとして教員が研究・教育のために蒐集した資料と寄贈資料からなっており、東洋美術、近代美術、考古学の3つの研究分野があります。まず東洋美術は、美術史研究者で文学部教授であった會津八一が寄贈した中国古代の明器や銅鏡、瓦当、金石拓本、仏像など約3,000件の會津八一コレクションを中心として調査研究・展示活動をしています。同じく近代美術では、黒田清輝による大隈重信肖像など早稲田大学にまつわる人物の肖像画をはじめとし、本学の70周年、100周年記念に当代きっての画家から寄贈された作品など、約700件の洋画・日本画のコレクションを有しています。また考古学は、縄文・弥生土器をはじめとし瓦、鏡、さらにはわが国でも有数のアイヌ民族資料など約6,000件の考古資料を有しています。さらに2004年には、旧富岡美術館コレクションとして、重要文化財1件を含む東洋陶磁器、禅書画など900件の東洋・日本美術の秀逸な作品群が寄贈されました。

會津八一の美術史学は、実物作品の研究と文献史料の研究を車の両輪のごとく駆使する学問として確立しました。會津は早稲田で初めて博物館の設立を提言しましたが、70余年を経て開館した当館は、現在、実物作品の調査研究をもとにした芸術・歴史学研究の拠点として活動しています。



助手の三宮千佳さんから説明を受ける山根さん。「會津八一は教育と研究のために東洋美術資料を蒐集しました。會津の精神を引き継ぎ、学生が触れて学べることを重要視したいのです」



展示台の下から椅子を引き出すと、坐ってゆっくりと資料を眺めることができます

message

教育研究の場から 文化資源の社会還元をめざして

大橋一章館長（文学学術院教授）

当館は昨年で開館10周年を迎えました。試行錯誤の助走期間を経て、次の10年は飛躍の時期にしたいと考えています。大学博物館の重要な使命は教育と研究です。学生が「本物」に触れることのできる場として、また早稲田の斬新な研究成果を発信する場としての位置づけを確立していきたいです。そのためにも、質の高い常設展示とアイデア溢れる企画展を併設していくことが課題です。もちろん、ご父母や校友、学外の方々にも気軽に訪れていただき、早稲田の文化資源を積極的に社会へと還元していくことが今後重要になると認識しています。



大隈重信の肉声演説を熱心に聴く山根さん

吉田所長 大隈が早稲田の前身、東京専門学校を設立したのは、近代的な立憲主義と国家の建設を目指すために、人材の育成が必要だったからです。

山根さん このコーナーでは、大隈総長の演説が聴けるんですか？

吉田所長 はい。これは、1915年の総選挙における演説レコードです。

山根さん ああ、歌うような口調。演説と日常の話し言葉が大きくかけ離れていたあの時代がうかがえますね。



「大隈重信の一生」が分かる映像コーナー。大隈邸には毎日大勢の客が詰めかけ、雨で客が少ないと「今日は入りが少ない」と寂しかったというエピソードも

創立から紡がれてきた 「建学の理念」を知る

入口に飾られているのは、早稲田カラーの総長ガウン。それを見上げて山根さんはこう語ります。「今の私の、子どもの言葉を育てる活動にも、学生時代、無意識のうちに身についた早稲田の『建学の理念』に促されているのかもしれない」。

早稲田大学の歴史と、創設者大隈重信および関係者の事績を明らかにし、将来に伝承していくために設立された大学史資料センター。その研究や所蔵品をもとに、建学の精神を多くの人に伝えるため大学創立125周年を記念して改修されたのが、大隈記念室です。ここでは大隈の生涯にわたる活動が紹介されています。

吉田所長は大隈記念室運営への思いについて、こう話します。「本学には『学問の独立』『学問の活用』『模範国民の造就』という、受け継ぐべき建学の理念があります。それを絶やさずに、学内外に発信し、大学の発展に貢献するのが当センターの役目です。その一環として、新入生の導入教育、またオープン科目のひとつとして、『早稲田学』という講義も当センターが行っています。大隈が歩んだ足跡を辿りつつ、そこから学んだことを生かし、未来への視点を磨き続けていくことが大切です」。

山根さんは、今回3つの機関を見学して、こんな感想を述べてくれました。「この価値ある財産をより多くの学外の方に知って、利用していただけるよう、大学から情報発信してほしいですね。それが日本だけでなく世界の文化に貢献することになり、早稲田大学への信頼を深めることにもなると思います」。

あらためて早稲田の魅力を再発見できた一日となったようです。

爆弾を投げられて足を負傷したときに着ていた洋服。このとき、大隈は片足を切断しますが、それでもなお政治活動に精力的に励んでいます



message

150年史編纂へ向けて 確かな体制作りを

吉田順一所長（文学学術院教授）

本学の歴史に関する研究は過去のものではなく、日々前進しています。100年史では明らかにできなかったことを含めて研究し、今後150年史の編纂を行っていくかなければなりません。大学史編纂のために特に重要なのは、大学全体で生み出された資料をいかに収集・管理するかということです。新たな文書管理規程を作成し、それに従って資料を準備することが必要。さまざまな文書が利用段階を過ぎた時に、当センターに集約され、必要な時にすぐ取り出せるアーカイブズ機能を強化した体制作りが課題です。

ここを見る！
利用する！

貴重な文化資源をもっと活用するために

各博物館、大学史資料センターの学芸員、助手から、

見逃せない作品、所蔵品についてや書籍刊行情報などを紹介してもらいました。

坪内博士記念演劇博物館

■デジタル・アーカイブ・コレクション

散逸しがちな演劇資料を体系的に収集、整理し、公開データベースとして発信しています。歌舞伎を題材にした浮世絵＝役者絵や、演劇に関連する貴重書の画像が見られるほか、近現代の上演記録から、チラシやプログラムなどの所蔵を検索できます。また、演劇博物館のデータベースをもとに構築した「早稲田大学文化資源情報ポータル」には、會津八一記念博物館や大学史資料センターの所蔵品情報も登録され、学内の文化資源を一元的に探索できるようになりました。



■AVブース

能、狂言、歌舞伎、文楽などの日本の古典芸能から、各国の民族芸能、演芸、映画、現代演劇まで、演劇に関する多様な資料が視聴できます。シェイクスピア作品の収集充実はもちろん、中国演劇やスペイン映画などの映像資料も収録し、録音方式の異なる海外作品も視聴可能です。また、日本の現代演劇、舞踊のDVDや落語のCDなども収集しており、演劇博物館の企画展示に関連した演劇講座や講演会の録画資料も備えています。



■「十二支二因メ録絵馬」模写屏風 昭和5年(1930)

演博は総数約150点にも及ぶ世界最大の文調の浮世絵コレクションを有しています。原画は一筆斎文調筆、安永2年(1773)に角虎の熊野神社(現、新宿中央公園内)に奉納された大きな絵馬です。模写ではありませんが、文調が描いた当初の色彩が蘇り、大らかな魅力にあふれた安永期の歌舞伎の舞台を彷彿とさせる作品です。(8月3日まで展示中)



■状況劇場「腰巻おぼろ妖艶篇」ポスター

1975年4～6月、上野不忍池水上音楽堂ほかで上演。唐十郎主催の状況劇場は、新宿花園神社に真っ赤なテントを張って公演を行い、通称「紅テント」と呼ばれました。ポスターは篠原勝之のデザイン。学生時代に演劇に熱中されていた山根さんも興味津々の一品。(8月3日まで展示中)



會津八一記念博物館

■アイヌ民族の衣装

本博物館にはアイヌ民族の工芸品、とりわけ衣装類が数多く収蔵されており、常設展示に供しています。これらは校友で北海道大学教授を務められた故土佐林義雄氏の蒐集によるもので、ご遺族から早稲田大学に寄贈されたコレクションです。衣装の華やかな色彩、多様な文様が特徴的ですが、この文様は木綿の生地に色彩豊かな和服の裂を縫い付けて表現されています。アイヌと本州との交流を示す歴史資料としても高い価値をもっています。



■會津ハルコレクション

常設展示をする會津ハルコレクションは研究と教育のために蒐集されましたが、なかでも明器は、中国古代の墓から出土する土や木で作られた副葬品です。古代人は死後の世界ではそれらが実物に変じ、楽しく豊かに暮らせると信じていました。写真は唐時代の「辟邪」。辟



邪は魔除けのための空想上の獣で、墓室の護り神でした。頭部には長く捲かれた大きな一本角がありますが、顔は人面です。眉をつり上げて眼を大きく見開き、口を一文字に結ぶ憤怒の表情は、唐代の神王そのものです。

■荻原守衛《女》1910(明治43)年 ブロンズ

本博物館の近代美術作品は、本学にゆかりのある方々よりご寄贈いただいた作品が中心を占めています。この作品も、本学名誉博士高玉樹氏よりご寄贈いただいた作品です。1908(明治41)年、パリからの帰国後、守衛は、相馬愛蔵・黒光夫妻が経営する新宿中村屋の近くにアトリエを設け、制作に励みました。この作品の石膏原型は明治維新以後日本人が造った彫刻ではじめて重要文化財に指定されました。日本近代彫刻のひとつの到達点を示す作品です。



大学史資料センター

■大隈重信の義足

明治22(1889)年、当時外務大臣を務めていた大隈重信は、暴徒に爆弾を投げつけられ右足を失いました。その後大隈が使用していた義足は現在大学史資料センターに所蔵されています。



■東京専門学校関係資料

大学史資料センターでは、明治15(1882)年の東京専門学校開校当初から、近年にいたるまでの大学の歴史に関する資料を広く収集・整理・保存し、広く一般の利用者に公開しています。



■大隈重信関係文書

創設者・大隈重信の事蹟をより広く明らかにすべく、図書館ならびに大学史資料センター所蔵の大隈重信宛の書翰6,000通以上を翻刻・出版する事業に取り組んでいます。04年10月から刊行を開始した本シリーズは、09年3月に第5巻が刊行。日本近代の歴史が凝集された、画期的な資料集です。A5判・全10巻・別巻1刊行予定。各巻10,000円(税別)。問合せ先＝全国の書店またはみすず書房(Tel 03-3814-0131)まで。



Information

※入館料はすべて無料

坪内博士記念演劇博物館

開館時間
展示室・和書閲覧室 10:00～17:00(火・金は～19:00)
貴重書・外国語図書閲覧室 10:00～17:00(土日は閉室)
AVブース 10:00～17:00(土日は閉室)
祝日、連休となる日曜日、夏季、冬季休業期間、年末年始、入試期間休館。
詳細は要問い合わせ
Tel 03-5286-1829
HP <http://www.waseda.jp/enpaku/index.html>

會津八一記念博物館

開館時間
10:00～17:00(入室は16時30分まで)
日・祝日、8月全日、夏季休業期間中の土曜日
冬季休業期間、年末年始、入試期間休館。
Tel 03-5286-3835
HP <http://www.waseda.jp/aizu/index-j.html>

大学史資料センター・大隈記念室

開館時間(大隈記念室)
開館時間、休館日ともに會津八一記念博物館と同じ
Tel 03-5286-1814(大学史資料センター)
HP <http://www.waseda.jp/archives/>

文化発信の新しい形を牽引する

今、本学では各界の文化人、学生、地域社会と連携をとり、文化発信の新しい形をつくろうとしています。秋に行われる「フォトジャーナリズム・フェスティバル」はその取り組みのひとつ。その概要と目指すものをお伝えします。

次世代を育てるフォトジャーナリズム・フェスティバル

今秋、本学とDAYS JAPAN共催により、フォトジャーナリズム・フェスティバルが行われます。現場のジャーナリストの仕事に触れながら、メディアの状況、未来についても考え、次世代を担うジャーナリストを育てる機会とするのが目的です。また、本フェスティバルでは、長いジャーナリズムの歴史と、日本唯一のジャーナリズム大学院を有する教育機関である本学の活動も紹介します。

これまで大学の各学術院と箇所が行っていたジャーナリズム活動を一元的に情報発信し、その力を結集させることも文化推進部の重要な役割です。今回のフェスティバル開催で道筋をつくり、今後各種の複合的なイベント

も継続的に行っていくことを視野に入れています。世界で何が起きているか、人々に何を伝えるべきなのか、を問う本フェスティバルは、同時に世界に向けた文化発信が重要な使命である本学の文化事業の意義も担っているのです。



フェスティバルでは、DAYS JAPANのフォトジャーナリズム関連写真の展示も。写真は第5回DAYS大賞1位「ケニア選挙後の混乱」(撮影：ワルテル・アストラダ【AFP】)

フォトジャーナリズム・フェスティバル INFORMATION

開催期間

コア期間2009年11月22日～12月5日
(全体：2009年10月～2010年2月)

コア期間には毎日各種イベントを開催。展示は「地球の上に生きる2004～2009『DAYS 大賞の5年』」、「広河隆一『人間の戦場40年』一核と中東問題」など学内各所にて開催。ほか「大スライドショー」、「音楽とジャーナリズムのコラボレーション」、「上映会」、「講演会・シンポジウム」、「ワークショップ等活動報告」、など多数企画。詳細は今後ポスター、チラシ、ウェブサイト「早稲田文化」などで告知。

問い合わせ先

TEL 03-5272-4783(文化推進部文化企画課)



『DAYS JAPAN』編集長 広河隆一さんに聞く

命をかけても伝えたい世界の真実

今回、早稲田大学でフォトジャーナリズム・フェスティバルを共催できることをとても嬉しく思っています。フェスティバルでは、世界最大のフォトジャーナリズム・フェスティバルであるフランスのベルビニヤン世界報道写真祭でも目玉となっている大型スクリーンでのスライドショーを大隈講堂で開催するほか、ジャーナリズムと音楽のコラボレーションによるコンサートなど、たくさんのプログラムを用意しています。展覧会では、気になった作品と時間の

許す限り対話し、自分が生きている社会で何が起きているのかを知り、そして、自分にできることは何かということを考えるきっかけにいただければと思います。多彩な方法で、世界の真実を伝え、ジャーナリズムの危機を問いかけたいと考えています。日本最大級の規模になりますが、これは早稲田の懐の深さであり、ジャーナリズムに関しては譲れないという強い思いによるものではないでしょうか。

私がフェスティバルを通して伝えたいことは、フォトジャーナリストが命をかけても伝えようとした世界の真実です。『DAYS JAPAN』がフォトジャーナリズムの発展のために実施している「DAYS国際フォトジャーナリズム大賞」が対象としているのは、人間と自然の尊厳が脅かされていることを告発する作品、人間と自然の尊厳を謳い上げる作品です。状況



6月11日文化構想学部表象・メディア論系主催で行われた、広河隆一氏講演会「戦争とフォトジャーナリズム」で、学生の質問に応える広河氏。写真・坂内 太(文学学術院専任講師)

に対する理解と責任を持って、常に被害者の側に立って写真を撮り、発表することがフォトジャーナリズムだと考えるからです。しかし現在は、そうしたジャーナリストのアイデンティティが希薄になり、本当に大事なことが伝えられず、私たちは、この国がどちらの方向に進んでいるかさえ分からない状況になっています。

フォトジャーナリストになりたい方だけでなく、世界で何が起きているかを知りたい方、これから世界を舞台として仕事をしたい方など、一人でも多くの方に足を運んでいただければ幸いです。

Profile

ひろかわ・りゅういち

1967年早稲田大学教育学部卒業後、イスラエルに渡る。帰国後、中東問題と核問題を中心に取材を重ね、1982年レバノン戦争とパレスチナ人キャンプの虐殺事件の記録で、IOJ大賞受賞。2002年『パレスチナ 新版』(岩波新書)で第2回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞、2003年に土門拳賞など数多くの賞を受賞。2004年にフォトジャーナリズム月刊誌『DAYS JAPAN』を創刊する。

社会に開かれた「早稲田文化」へ

本学では、「早稲田文化」を広く発信していくために、地域や各界の文化人の方々と連携を深めていこうとしています。「早稲田文化」の創造と発信には何が必要なのでしょう。3人の文化人の方から本学へのメッセージをいただきました。

「早稲田文化」をつくるのが日本、アジアの文化につながる



文化人類学者・前文化庁長官
青木保

大学は社会において文化の拠点のひとつであるという意識を、日本の大学はもっと強く持たなくてはなりません。早稲田大学は、近代日本文化を背負う人材を多数輩出していますから、まさに文化的拠点の一つとして、その「創造の軌跡」をもっと広く開かれた形で社会に示していく必要があるでしょう。

それには、音楽や映画や演劇など、さまざまなパフォーマンスに対応できる多機能なシアターを持つといいですね。現在は大学のいろいろな箇所でも文化活動が行われていますが、その力が散在していて外から見えにくい所がある。文化発信の中心地となる文化空間を造ることで、社会全体にも大きな影響を与えるはずですよ。

オックスフォード大学やケンブリッジ大学を例にすると、これらの大学は、言葉、ファッションなどあらゆる面において、イギリス文化の基礎を形成しています。ハーバード大学やエール大学にしても、独自の文化的な世界を展開している。それらと同様に早稲田にも、早稲田独自文化の世界を展開できる文化的特色がもっとあるはずだと思います。今後、大学の発展のためにも、文化研究という面だけでなく、「早稲田」という文化をつくる。それが日本の文化でもあり、アジアの文化でもあり、グローバルな世界の文化にも通ずる。そういった構想を強力に進めていかれることを心から期待しています。

Profile

あおき・たもつ

1938年東京生まれ。東京大学大学院修了。大阪大学で博士号取得。大阪大学教授、東京大学教授。早稲田大学アジア研究機構教授などを歴任。その間、米ハーバード大学客員研究員、仏国社会科学高等研究院客員教授、独コンスタンツ大学客員教授などを務めた。1965年以来、アジアでフィールドワーク研究に従事。日本民族学会（現文化人類学会）会長（1994-96）。同学会名誉会員。2007年4月～09年7月、文化庁長官。サントリー学術賞、吉野作造賞、紫綬褒章などを受ける。

日本を知り、世界を知り、国際化へ



作家・日本ペンクラブ会長
阿刀田高

知的なリーダーとして、日本文化のすばらしさ、その独自性を認識してほしい。広く知り、そして一つか二つ、例えば歌舞伎とか鎖国の意味とか、深く語れるものを培ってほしい。21世紀は国際化の時代であり、国際化とは、まず自国を知り、次いで他国を知り、それを融合させていくことにほかならない。キャンパスで過ごす年月が、この方向性を培うものであってほしいと願う。

私が代表を務める日本ペンクラブは、来秋、四半世紀ぶりの国際ペン大会を東京で催す。テーマは「環境と文学—今、何を書くか」である。早稲田大学の共催を得て、このキャンパスで内外の文学者のさまざまな参加が企画されている。学生諸君の助力と参加を期待したい。こういう国際的な集まりにもどうか広く慣れ親しんでほしいと願う。

Profile

あとうだ・たかし

1960年早稲田大学第一文学部卒業。国立国会図書館に勤務しながら執筆活動を始め、1978年『冷蔵庫より愛をこめて』（講談社文庫）でデビュー。1979年短編『来訪者』で日本推理作家協会賞、短編集『ナポレオン狂』で直木賞、1995（平成7）年『新トロイア物語』（以上講談社文庫）で吉川英治文学賞を受賞。他に『シェイクスピアを楽しむために』（新潮文庫）『プルタークの物語』（潮出版社）など著書多数。本学文化推進部アドバイザー・コミッティ委員

坪内逍遙の志を伝え、演劇を創造し開拓する場を



狂言師
野村万作

08年11月に本庄市と早稲田大学との共催で行われた「本庄早稲田能」では、息子の萬斎と親子の役で「二人袴」を演じました。また、09年5月には、中国・北京大学で狂言を演じる機会があり、どちらも「こんなにも興味を持って狂言を見てくださるのか」と感激しました。早稲田大学と本庄市、また北京大学との深い交流を土壌に、「狂言」を紹介できたことに、ご恩を感じています。

日本も中国も同じ東アジアの国として、伝統劇に共通性を持っています。北京での公演を経て、夫婦愛や、神への畏怖、人と人はどうあるべきかなど、日本人の創ったテーマを笑いを含みながら伝えるという伝統芸能「狂言」を、

もっと世界に発信していく必要があると私自身も感じています。

早稲田には、演劇博物館や演劇の専攻もありますが、それらは学問をする人たちの場。実践の演劇の場は、サークル活動のみというのが現状です。早稲田が輩出したさまざまな分野で活躍する方の知恵と、学問の蓄積、大学が所蔵する膨大な文化資源を用いて、新しい演劇を創造し開拓する「創造演劇学科」といった物ができたらいいのではないのでしょうか。

これは夢ですが、「世界を視野に入れる」という理念のもと、演劇博物館を創設した坪内逍遙の志を伝え、より具体的に発信して欲しいと願っています。

Profile

のむら・まんさく 1953年早稲田大学第一文学部卒業。重要無形文化財各個指定保持者（『人間国宝』）。祖父故初世野村萬斎及び父故6世野村万蔵に師事。「万作の会」主宰。狂言の秘曲である『釣狐』の演技で芸術祭大賞を受賞した他、紫綬褒章、坪内逍遙大賞など多くの受賞歴を持つ。また、2002年には早稲田大学芸術功労者表彰を受ける。国内外で狂言普及に貢献し、ハワイ大、ワシントン大では客員教授を務める。古典はもとより新しい試みにもしばしば取り組み、代表作に『月に憑かれたピエロ』『子午線の祀り』などがある。著書に『太郎冠者を生きる』（白水社Uブックス）、『狂言三人三様・野村万作の巻』（岩波書店）がある。

EVENTS・企画展示INFORMATION

大隈記念講堂

- 「感劇・環境」－“演劇”が喚起する地球環境への感性と国際交流－
日時：11月4日(水) 13:30～19:00
永井多恵子氏と井上ひさし氏を迎え、演劇を通して地球環境の問題を考える。
- 「生命のコンサート」－ジャーナリズムと音楽のコラボレーション－
日時：11月23日(祝) 15:00～18:00
立松和平氏と広河隆一氏による講演。チェルノブイリ被害者で歌手のナターシャ・グジー氏、アイヌ歌手酒井美直氏、作曲家青柳拓次氏、加藤登紀子氏らが生命の尊厳を称えて歌う。

小野記念講堂

- 学生演劇公演
日時：10月3日(土)・10月31日(土) (予定)
13:00・17:00 開演
みのかも文化の森で野外劇を市民に披露してきた劇団「森」とフィクション世界で夢を語る劇団「おぼんろ」による学生演劇。

問合せ先：早稲田大学文化企画課
Tel: 03-5272-4783

- 国際研究集会「映画におけるジャポニズムとオリエンタリズム」
日時：11月9日(月)・10日(火) (仮)

今夏～秋にかけて行われるEVENTや企画展示などの予定をご紹介します。「早稲田文化」の門はすべての方に開かれています。ぜひ、足をお運びください。

演劇博物館に所属する研究員と海外からの招聘講師による研究発表と討論。

問合せ先：演劇博物館 グローバルCOE
Tel: 03-5286-8110

坪内博士記念演劇博物館

- 「現代演劇シリーズ第34弾 太田省吾展」(仮)
日時：9月20日(日)～2010年2月5日(金)
劇作家・演出家太田省吾の舞台写真や自筆原稿を通じて太田の劇世界を振り返る。
- 日本フェノロサ学会第30回年次大会記念「『鷹の井戸』を廻る輪舞曲(ロンド) フェノロサと能」(仮)
日時：9月25日(金)～10月16日(金)
フェノロサの死後発見された草稿から生まれた創作能『鷹の井戸』。本年、日本初演から70年を記念し、フェノロサと能を巡る企画展を開催。
- 「新派120周年記念～館藏品でたどる新派歴代名優展～」(仮)
日時：10月1日(木)～11月15日(日)
新派121年目の新しい一歩を記念して、新派劇の歴史をたどる。

問合せ先：演劇博物館
Tel: 03-5286-1829

會津八一記念博物館

- サムライの美学 一甲冑師明珍宗恭とそのコレクション－
日時：9月24日(木)～10月18日(日)
概要：2007年に甲冑師・明珍宗恭氏から寄贈された日本の甲冑資料を中心に、明珍氏の業績を紹介。

問合せ先：會津八一記念博物館
Tel: 03-5286-3835

大学史資料センター

- 2008年度受贈資料展 資料とあゆむ学苑の記憶
日時：6月27日(土)～8月3日(月)
会場：大隈記念タワー 10階 125記念室
概要：08年度新たに大学史資料センターに寄贈された資料に見る学苑の歴史。
- 秋季企画展 西村眞次と早稲田史学
日時：9月28日(月)～11月8日(日)
会場：大隈記念タワー 10階 125記念室
概要：早稲田大学史学科の礎を築き、文化人類学を開拓した西村眞次の業績を追う。

問合せ先：大学史資料センター
Tel: 03-5286-1814

第二世紀へのメッセージ



早稲田大学に関係のある方にお話を伺い、
客観的な視点により、
早稲田大学の魅力や課題を浮き彫りにします。



写真：金子悟

株式会社東急文化村
代表取締役社長

田中 珍彦 さん

【プロフィール】

たなか・うずひこ
1940年生まれ、東京都出身。1965年、早稲田大学第一文学部卒業。
1974年、株式会社東急エージェンシー入社。1984年、株式会社東急百貨店に転籍し、Bunkamuraの開発計画からかかわる。1988年、株式会社東急文化村の設立と同時に取締役に就任。オーケストラや劇団とフランチャイズ契約を結び、お互いの特性や魅力を最大限に生かす「フランチャイズシステム」、企業が文化・芸術を長期的に支援・育成する日本初の「オフィシャルサプライヤーシステム」、文化・芸術の各界の第一線で活躍する方々が企画・運営に加わるプロジェクト「プロデューサーズ・オフィス」などを確立。Bunkamuraは1999年度の「メセナ大賞」受賞に輝いた。2001年に同社副社長、2007年に同社代表取締役社長に就任し、現在に至る。

自由な発想ができる 型にはまらない人材の輩出を

1989年に誕生した日本初の大型複合文化施設「Bunkamura」。コンサートホール、劇場、美術館、ミニシアターを中心に構成されたクリエイティブな空間は、誕生当初から渋谷の街で新しい文化を発信してきました。今回は、設立当初から「Bunkamura」を育ててきた田中珍彦さんに、学生時代のエピソード、本学への期待についてお話を伺いました。

演劇が自分の将来を 照らしてくれた

—田中さんはどのような学生時代を過ごしましたか。

私は子どもの頃から早稲田に強い憧れがありました。「先のことは分からないから、早稲田の4年間で人生について考えよう」と思い、自由に学べる学科を探したのです。そこで見つけたのが、第一文学部の演劇専修でした。

入ってみると、みんな演劇に精通している学生ばかり。劇作家の清水邦夫さん、別役実さんなど、その後演劇界で活躍する方がたくさんいたので、刺激を受けずにはられない環境でした。1年生の時、私の将来に大きな影響を与

えた出来事がありました。先輩から「卒業公演の手伝いをしてほしい」と言われたのです。与えられた役目は限りなくたくさんチケットを売りさばくこと。そんな経験はないので、とりあえず地図を買い、大学近くの高田馬場から実家の荻窪の間にある「文」の地図記号に印を付けて、それを頼りに高校・短大に売り歩きました。三百数十枚売り尽くしてから先輩のところに報告に行くと、「どうやって売ったんだ」といたく感動されたのです。ご褒美におでんをおごってもらったことをよく覚えています。すると先輩は「チケットを売るのは『制作』という仕事の一つだよ」と教えてくれました。それから裏方の仕事に興味を持つようになったのです。

今もそうなのですが、私は仲間と先に進まない議論をするよりも、現場で実際に身体を動かすことが好きな「実務屋」。その頃から灯台のあかりに吸い寄せられるように、制作プロデューサーとしての道を選んでいったのです。

「演劇的視点」が固定概念を打ち破る

——大学時代に学んだことで、最も役立っていることは何でしょうか。

「演劇的視点」を身につけられたことです。「Bunkamura」では、演劇に限らず、オペラ、オーケストラのコンサートや多ジャンルの音楽、映画、美術など、枠にとらわれずにさまざまな分野の芸術を発信しています。例えば、1995年にオペラ「蝶々夫人」をプロデュースした時には、「演劇的視点」がとても役立ちました。たまたまロンドンで『マクベス夫人』のオペラを鑑賞していた時のこと。マクベス夫人役の歌い手が、鉄パイプのベッドに寝た状態で天井からつり下げられ、頭を下にして見事に歌い上げていたのを見て衝撃を受けました。普通、オペラは歌手の歌声を第一に考えるのでこんな姿勢はとらないもの。しかし、「演劇的な演出が加わることで、こんなにおもしろくなるのか」と目から鱗が落ちました。そこで、その作品を手掛けた有名演出家、デイヴィッド・パウントニーにすぐに交渉。当社が用意していた資金の3年分を投じてしまったのです。そうしてできたのは、なんとネグリジェ姿の蝶々夫人。あるお客様からは「ネグリジェ

姿の蝶々夫人なんて見たくない!」とお叱りを受けてしまいました。しかし、この衝撃的な演出が作品の評価を高めたのです。「演劇を学んで良かった」と思った瞬間ですね。

人は「しななかったこと」に後悔する生き物

——早稲田に期待したいことはどんなことでしょうか。

これからも型にはまらない人材を輩出していただくことを望みます。早稲田には演劇界はもちろん、各界で活躍している卒業生がたくさんいます。そういった方々は、型にはまらない学生だったから、自由な発想ができる。つまり、革新的なことが実現できるのです。

私も早稲田で他の学生とは少し違う活動をしていました。演劇専修の仲間たちと卒業公演を開催した時のこと。東京だけで終わらせるには寂しく、みんな離れがなくなっていたところ、そのうちの一人が「地元の灘に公演できるいい場所があるから、そこでもやろう」と提案しました。すると、もう一人が「名古屋にもあるよ」と言い、地方公演を実施することになったのです。また、早稲田には著名な学生劇団が多く、演劇専修の学生は言うにおよばず、各学部から参加していました。しかし、私たちは1年生の時からそうせず、専修の仲間たちと演劇の同人誌を作り、地方公演もしました。当時はめずらしいことだったようで、大学側の方々が「そんなことをする学生は最近はいないよ」と喜んでくれたのを覚えています。私はそれがとても嬉しかった。大学の運営スタッフや教職員の方々も、何か新しいことをしようとする学生を、ぜひ温かく見守って応援していただきたいと思います。

——ご父母の方々にメッセージをお願いします。

ぜひご自分のお子様の考えを認め、やりたいことを自由にやらせてあげて灯台のあかりを見つけさせてあげてください。人はしたいことを実行して失敗したとしても、後悔することはありません。しななかったことに対して後悔する生き物なのです。ご父母の皆さんは心配かもしれませんが、お子さんを信じてあげてほしいですね。



This theme :

Openness

Profile

Graduated from the University of Hawaii, Manoa, in 1973 with a BA in English and Japanese. PhD in Japanese from Stanford University in 1985. Lecturer in the School of Political Science and Economics, Waseda, 1987 and was promoted to Professor in 1994.

Q : Please provide a self-introduction.

A : My association with Japan started when my family moved to Hawaii during high school in the late 1960s. I had close Japanese-American friends and took part in a Japanese-language program. In college - also in Hawaii - I visited Japan twice as a tourist and ended up taking a degree in English literature and Japanese. When I graduated, I came to Waseda for two years as a Japanese Government Scholarship student. I applied to graduate school, spending the next 10 years moving between California and Tokyo, finally completing my dissertation on Izumi Kyoka at Stanford University in 1985. The year before, while still conducting research in Japan, I started my first full-time academic position at Musashi University in Tokyo. I was invited to move to Waseda in 1987 and have been here ever since.

Q : Why did you choose to specialize in comparative literature and are you working on any research now?

A : It is not easy to identify a single reason for deciding to study comparative literature, but if I had to choose a keyword, that word would probably be “openness.” I find the idea of concentrating on a single country, region, or academic field to be very limiting, and comparative literature seemed to offer the best opportunity to make sure that a liberal education would be more truly liberating for me. Among other things, I am currently interested in the narrative patterns that can be found in Japanese and English fiction, especially with respect to the notion of the Gothic. Many non-Japanese readers regard Izumi Kyoka as a Gothic novelist, whereas in Japan that is certainly not Kyoka’s reputation. The question of why non-Japanese readers rely on a concept that is historically European to discuss a Japanese writer who is widely considered to be “uniquely” Japanese suggests possible limitations on interpretation by both sides that I hope to explore further.

Q : Do you feel that there are differences or things in common between Japanese universities and universities in your own country?

A : Apart from the standard ones, I am concerned with the relative lack of interdisciplinary freedom on the part of Japanese university students. Like many American university students, I was not required to declare a major until the end of my second year. To have to choose a major field of study at the age of 18 can be quite restrictive, and American universities for the most part require their students to take a fairly broad range of courses regardless of their specialty. At the same time, it seems to me that many Japanese universities, including Waseda, are working to increasing the flexibility with which students can plan their education, by encouraging study abroad, for example. To point to a specific case here at Waseda, the establishment of the School for International Liberal Studies can be taken to show the university’s commitment to a multidisciplinary, multicultural approach to education, and other schools - including my own School of Political Science and Economics - have also moved toward a more cross-disciplinary approach to their curricula.

Q : What type of things would you like your Japanese students to learn from your lectures? Also are there any things that you try to do in the classroom?

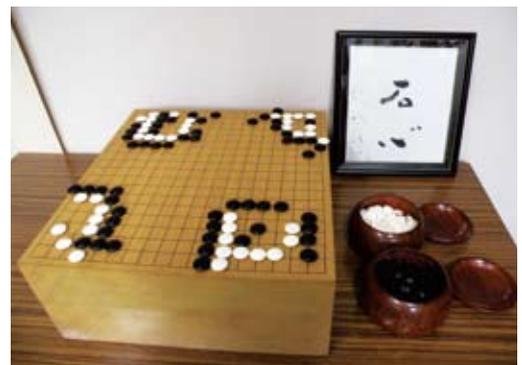
A : I want students to be curious about a topic and be willing to approach issues in a new way. I think that this attitude is important not only for classes traditionally considered academic but also for classes that are often considered to be language-based, such as composition and translation. As a result, I try to appear enthusiastic about the subject and to point out new directions into which students’ curiosity can be channeled.

Q : Is there anything that you are interested in right now?

A : I’m interested in popular culture, and have recently spent some time trying to familiarize myself with the history of popular music in both Japan and the West. It is a very entertaining way to try to explore the cultural problem of the universal versus the distinctive. My main hobby is the game of Go, and although I haven’t had much time to play it in recent years, one of the great pleasures I expect to have after I retire is going regularly to a Go parlor.

Q : What are your hopes for the future?

A : As a researcher, to extend my range and understanding, as a teacher, to help students extend their own understanding, and as a resident of Japan, to contribute as far as I am able to transcultural values in Japan.



Go board and signature of the 9th dan professional Go player, Cho Chikun (趙治勲)

このコーナーは、教育ジャーナリストとして活躍中の山岸駿介氏による教育問題に関する連載コーナーです。

プロフィール

やまぎし・しゅんすけ
1958年 新潟大学人文学部法律学科卒業。新潟日報、朝日新聞記者を経て、多摩大学教授(教職課程)。定年退職後、昨年まで客員教授。1968年 大宅壮一東京マスコミ塾第一期生・優等生。1970年 新聞連載「明日の日本海」で菊池寛賞受賞。教育ジャーナリストとして活躍。「大学改革の現場へ(玉川大学出版部刊)」など著書多数。



「教育」と「研究」のバランス

博士課程定員削減の通達

知り合いの僧侶が挨拶にくれた手紙の中で、学位論文の執筆に追われていると言っていた。「まだ提出の見通しがたっている訳ではありませんが」とあり、謙虚な感じがした。もっとも、謙虚さを感じたのは、私の思いすごしで、当人は死に物狂いだったのかもしれない。

というのは、そのころ新聞に、文科省がこれまでの大学院重視政策を転換し、博士課程の定員を削減するよう、国立大学に通知した、と報じられたからだ。国立大学にこう言えば、公、私立大学にも同じことを言わねばならないはずだから、たしかに大学院政策の大転換である。

例によって、国立大学にも、何人減らせとか、何割をメドに削減を考えろとは、いっていない。記事では言われた大学が考えろという訳だ。

これには法科大学院や教員養成課程なども入っているそうだから、アカウントینگスクールなど、その他諸々の大学院も入ってくるのだろう。

こんな状況では、ご自由にとか、良きにはからえと言っているわけではないから、裏に回っては、種々、いろいろとやっているのではないか。確証がある訳ではないが、どう考えても、昼寝をしながら、すまされるほど事は簡単ではない。

東京大学などは、さっさと自分で考え、文科省の指示など知らなかったという顔をして、新しく決めてくるかもしれない。案の定、東京大学新聞に、法科大学院が今年の春から議論を始めて、独自方針で

定員削減を決めたと載っていた。

07年と08年は全国最多の合格者を出したので、教員たちには、質の高い授業を学生たちに提供するのに、大変な負担になっている。だからここで負担を減らさないと、教育と研究のバランスが崩れてしまう。教員が研究を更新し、その結果を常に教育に反映する、それによって教育の質を確保していかなければならない、というのである。

これが東京大学の法科大学院にしか通じないことなのか、どこの法科大学院でも同じで、学生を減らして、研究にシフトしないと、次の教育が手薄になり、立ち往生するのか、そここのところが分からない。

法務省に追従する文科省

教育が手薄になると言うが、それなら、文科省が、あれほど多数の博士課程の定員増を、なぜやれたのか。法務省サイドがロースクールを作ると言い出したとき、紆余曲折があつて、結局、専門職大学院にしようとして、法務省サイドが中央教育審議会大学分科会に持ち込んだ。このとき、中教審の委員たちにいろんな問題を厳しく指摘され、定員数の抑制を促す発言も聞かれた。

だが決まってみると、法務省サイドの言いなりで、これまでに至っていた。その間、学生の質が下がるからと、文科省が大学院側を厳しく警告したという話を知らない。教育の充実については口を酸っぱくして述べていたが、定員が多いから教育研究に力を尽くせとは言っていない。それが法科大学院は、中教審の言っ

ていた通りに、定員を減らさないと大変なことになると、法務省サイドが言い出した。それを聞いて文科省は、定員削減に動き出したのである。きれいな言葉ではないが、尻馬に乗るといって分かります。強いところが何か言うと、その尻馬に乗って動くことが目立ってきた。

こう書くと哀しい役所だというイメージになるし、農業ではないが、西高東低論者だと、そのことだけで、話がついてしまう。

ドクターが政策の被害者に

博士課程の定員を増やせば、学位論文を書かせて修了させることはむずかしい。やむを得ず、単位取得満期退学という言葉を使い、オーバードクターになった後で、本物の学位論文を書かせるという仕組みを考えた。

それがうまくいけば、それでもいいのかもしれないが、オーバードクターになれば、何かと忙しい。自分が勉強した大学院に在るとは限らず、むしろいろんな大学で非常勤講師や実験助手を務めることなども多いだろう。そうすると、学位論文を書くということは、大変な仕事になる。私の知り合いの僧侶のように、素直に論文に取り組めるとは限らない。

むずかしい、むずかしい、と言っていれば、何でもむずかしく見える、と叱られそうだが、非常勤講師や実験助手が、政策の犠牲者というのは大袈裟にしても、政策の被害者であることに、間違いはない。

ではどうすればいいのか。しっかりした政策をこれからは、だれが考え、だれが作るのか。考えてもらいたい。

プロ・ ローグ



理工学術院
林泰弘教授

プロフィール

はやし・やすひろ
1967年福井県生まれ。早稲田大学理工学部電気工学科卒業後、同大学院に進む。同大学理工学部助手、茨城大学工学部講師、福井大学大学院工学研究科准教授を経て、2009年より現職。研究テーマは、環境に適した電気エネルギーの安定供給など。家族とバーベキューをしている時が一番幸せ。

環境に配慮した電気エネルギーで みんなが幸せになる 社会を作りたい

私 は、「明るいね」とか「元気だね」とかと言われることが多いのですが、その性格は、歌や踊りが大好きで、いつも元気な祖母ゆずりかもしれません。両親が共働きだったため、おばあちゃんっ子で育ちました。常々言い聞かされたのは「よく遊び、よく学べ」ということ。その教えが私の原点になっているのかもしれない。

小中高と野球を続けてきましたが、大学時代はスキー、テニスなどにチャレンジし、成績は別として、講義はいつも前の席で受けるように努めました。恩師である研究指導教授の先生は、授業が分かりやすく、お人柄も魅力的で、今も憧れの存在。忘れられないのは、大学院生時代に、祖母が福井から上京した時のことです。祖母に先生を紹介すると、恐縮してしまって先生を拝みながらその場で土下座してしまいました。すると驚いたことに、先生も膝をついて祖母と話をしてくださったのです。田舎から出てきた祖母に対する恩師の心ある態度は、一生忘れることはないですね。

私の主な研究分野は、環境に配慮した電気エネルギーの安定供給です。太陽光や風力などの再生可能エネルギーは、まだ一定の品質で供給し続けることが技術的に難しく、従来の電力と一緒に使うことが簡単ではないというのが現状です。そのため再生可能エネルギーを蓄電するための技術や、さまざまな電力を同時に安定的に使うための技術開発がそれぞれの分野で進められています。大学では、未来社会が持続可能で環境に優しいエネルギーを利用できる形を目指して、中立的な立場で研究開発をしています。30代半ばくらいからライフワークとして人生をかけてみたいと考えるようになりました。このテーマに出会えたことを感謝しています。

この春、久しぶりに母校に戻ってきましたが、後輩たちの目がきらきらと輝いているのを見て嬉しくなりました。間もなくゼミも始まりますが、学生たちに伝えたいのは、自分の研究を客観視することの重要性です。研究に入り込んでしまうと視野が狭くなり、本来の目的を見失ってしまうことがあるからです。我々は共同研究の機会も多いですが、常に相手側の信頼に応え、相手の立場に立つということが大切です。

もう一つ学生たちに伝えたいことがあるとすれば、何事にも魂を込めて、ということ。熱いことを恥ずかしがる風潮もありますが、何にでも熱くなれるのは素晴らしいことです。自分が大事にしたいことに魂を込める思いで取り組めば、必ず何か生まれます。これは自分にも課していることでもあり、私自らが情熱をもってのぞみたいと思っています。

これまでの人生で実感しているのは、出会いと経験が人を育てるということです。様々な経験が視野を広げ、恩師、仲間、家族との出会いが自分を成長させてくれました。そして、感謝する気持ちがあれば、困難があっても前に進むことができますし、人を羨むこともなくなると思っています。誰だって社会の役に立っているのですから。あらゆることに感謝する気持ちを大切に、これからも人生を楽しみたいと思っています。

休日は、妻と3人の子供たちと一緒に、自然のある場所に出掛けます。こんな風景を見ては、幸せを噛みしめています



▶ 休日は、妻と3人の子供たちと一緒に、自然のある場所に出掛けます。こんな風景を見ては、幸せを噛みしめています

Books



本学で活躍される先生方の著書をご紹介します。
※()内は著者・編者・監修者の所属です

今号のオススメ

『時代を読む —新聞を読んで・1997-2008』

水島朝穂(法文学術院)著 柘植書房新社
2009年4月刊



著者は、NHK ラジオ第一放送「新聞を読んで」のレギュラーを12年続けている。3カ月に1度、その週の新聞記事をラジオで語る。12分30秒の世界。毎回、憲法研究者としての視点から新聞各紙を比較・検討する。本書は、第1回放送(1997年4月26日、ヘルー日本大使公邸人質事件など)から最近までをすべて収録したものである。個々の「点」にみえる出来事も、12年の単位でみたとき、時代の「相」となっていく。この感覚は「次代を読む」ことへもつながるだろう。最近、情報収集はネットでの検索が主流だが、新聞という「紙」媒体を活用していくことも、思考を鍛え、磨いていく上で有益ではないか。本書は新聞の意義と可能性を再確認させてくれる。

<http://www.asaho.com/> (著者のホームページ)

『認知症高齢者 —中庭のあるグループホーム』

卯月盛夫(芸術学校)編著 明文社
2009年5月刊



毎朝、中庭で採れた野菜を見て昼食のメニューを考え、みんなで料理をつくる。午後は、中庭ボランティアと世間話をしながら、保育園のこども達と中庭で遊ぶ。また、中庭の見える個室でお友達とお茶を飲みながらおしゃべりをする。もちろんウッドデッキでひとりて本を読んだり、絵を描くこともある。夏祭り、春と秋のオープンガーデンには、ご家族や地域の方々がたくさん中庭を訪れる。ここに住む認知症高齢者の生活にはいつも「中庭」がある。緑と水、花と土、風と光のあるこの豊かな環境が人を癒し、人と人を繋ぎ、静かな時間を与えてくれる。本書は、この南町田プロジェクトに参画した福祉、園芸、建築、まちづくりの専門家が、その計画プロセスと実態を明らかにしている。

- 『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学』
川上郁雄(国際学術院)編著 明石書店 2009年1月刊
- 『「移動する子どもたち」のこぼの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振』
川上郁雄(国際学術院)ほか編 ココ出版 2009年3月刊
- 『猫たちの舞踏会—エリオットとミュージカル「キャッツ」』
池田雅之(社会科学総合学術院)著 角川学芸出版 2009年1月刊
- 『情報新時代のコミュニケーション学』
寺島信義(理工学術院)著 北大路書房 2009年3月刊
- 『「係長」山口鐘の処世術』
小玉武(広報室参与)著 筑摩書房 2009年3月刊
- 『中国古代の社会と黄河』(早稲田大学学叢書)
濱川栄(高等学院)著 早稲田大学出版部 2009年3月刊
- 『学校管理職に求められる力量とは何か—大学院における養成・研修の実態と課題』(早稲田教育叢書)
白石裕(元教育・総合科学学術院)編著 学文社 2009年3月刊
- 『「食」と発達、そして健康を考える—母親の栄養と赤ちゃんの発達と成長後の健康』(早稲田教育ブックレット)
坂爪一幸(教育・総合科学学術院)編著 学文社 2009年3月刊
- 『犬と人のいる文学誌』
小山慶太(社会科学総合学術院)著 中央公論新社 2009年4月刊
- 『歴史のはざまを読む—薩摩と琉球』
紙屋敦之(文学学術院)著 榕樹書林 2009年4月刊
- 『現場直言!自治体の人材育成』
稲継裕昭(政治経済学術院)著 学陽書房 2009年5月刊
- 『分権改革は都市行政機構を変えたか』
稲継裕昭(政治経済学術院)ほか編著 第一法規 2009年3月刊
- 『路面電車を守った労働組合—私鉄広電支部・小原保行と労働者群像』
河西宏祐(人間科学学術院)著 平原社 2009年5月刊

Events



本学で2009年7月～10月に開催されるイベントを一部ご紹介します。
詳細は、直接【問合せ先】にご確認ください。
その他のイベントにつきましては、本学Webサイト
(<http://www.waseda.jp/>) をご覧ください。

WBS(早稲田大学ビジネススクール)フェア

会場 早稲田キャンパス11号館

日程 7月26日(日) 12:00受付開始、13:00プログラム開始

MOT夜間移行、MBA(夜間主)定員増等々、2010年度よりWBSが大きく変わります。WBSフェアは、新生WBSを知る絶好の機会。奮って参加ください!
なお、当日は入試要項や入試過去問題の無料配布も行います。

【問合せ先】大学院商学研究科事務所(早稲田大学ビジネススクール [WBS])
TEL: 03-3202-4369 <http://www.waseda.jp/wbs/>

大学院ファイナンス研究科 開催イベント

会場 日本橋キャンパス(コレド日本橋5F)

①「2010年度入学説明会」

日程 第1回: 7月31日(金) 第2回: 8月21日(金) 第3回: 9月11日(金)
各回とも19:00開始

ファイナンス研究科の入試担当者が入学選抜の実際について具体例を交えた説明を行います(キャンパス見学、個別相談も実施)。

②「オープンキャンパス2009」

日程 9月2日(水) 18:00～21:30予定(開場17:30)

ファイナンス研究科の専任教員が模擬授業を実施。修了生によるキャリア・ディスカッション、個別相談にも対応します。

【問合せ先】大学院ファイナンス研究科入試広報担当
TEL: 03-3272-6784 <http://www.waseda.jp/wnfs/>

オープンキャンパス

日程 8月1日(土)2日(日)3日(月)10:00～16:00 会場 早稲田・戸山・西早稲田キャンパス

日程 9月13日(日)10:30～16:00 会場 所沢キャンパス

日程 8月1日(土)10:00～16:00 会場 [大阪]スカイビル3階 梅田ステラホール
[福岡]エルガーラ8階 エルガーラホール

日程 8月2日(日)10:00～16:00 会場 [大阪]関西大学千里山キャンパス

受験生の皆さんに、早稲田を体感していただきます。

【問合せ先】入学センター TEL: 03-3203-4331

第22回 ユニラブ

日程 8月5日(水)10:00～16:00

会場 西早稲田キャンパス

小中学生のための科学まつり。早稲田大学で見て触って科学体験。

【問合せ先】ユニラブ事務局

TEL: 03-5286-3051 FAX: 03-5286-3456

E-mail: unilab@list.waseda.jp <http://www.waseda.jp/unilab/>

稲稜祭

日程 9月19日(土)～20日(日)

会場 早稲田大学本庄高等学院(本庄キャンパス)

早稲田大学本庄高等学院の文化祭

【問合せ先】本庄高等学院 TEL:0495-21-2400

商学研究科

(早稲田大学ビジネススクール [WBS] 夜間主(MBA / MOT) 入試説明会

日程 10月3日(土) 会場 早稲田キャンパス11号館

2010年度募集商研MBA(夜間主)・MOT(夜間主)両プログラムの最新入試情報を得る最大のチャンス! 当日は各2010年度開講モジュール責任者によるモジュール別説明会(MOTプログラムを含む)を開催する他、入試要項や入試過去問題の無料配布も行います。

【問合せ先】大学院商学研究科事務所(早稲田大学ビジネススクール [WBS])
TEL: 03-3202-4369 <http://www.waseda.jp/gradcom/>

学院祭

日程 10月10日(土)～11日(日)

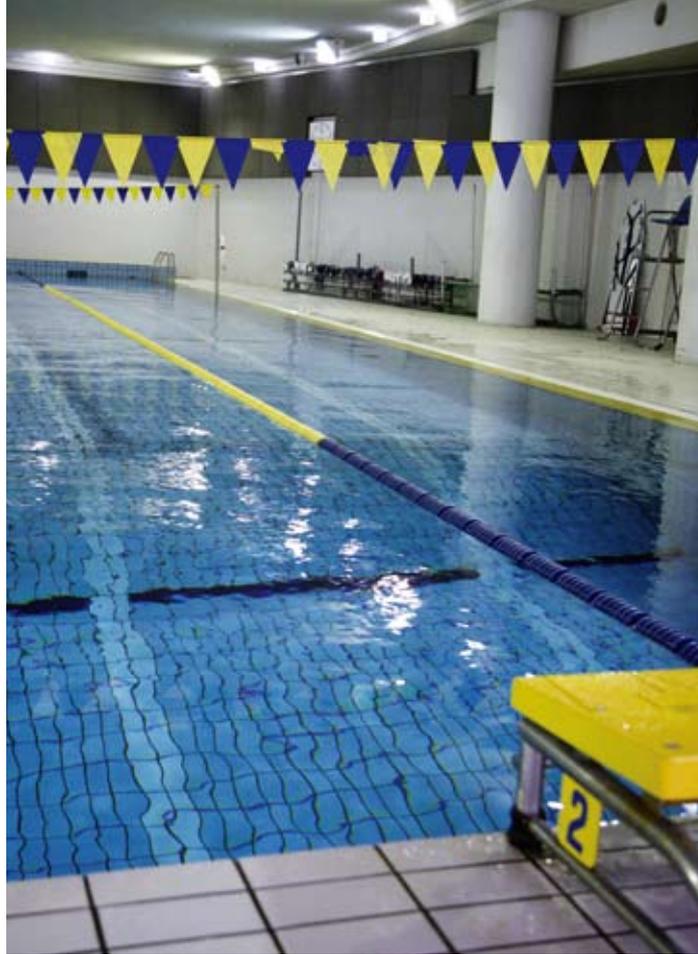
会場 高等学院(上石神井キャンパス)

早稲田大学高等学院の文化祭。

【問合せ先】高等学院 TEL:03-5991-4151 <http://www.waseda.jp/gakuin/>



早稲田



写真：竹之内要人
(国際情報通信研究科修士1年)

Rediscovery of WASEDA

再発見

cover story

表紙のお話

日本初のオリンピック入賞を讀えて。

戸山(文学学術院)キャンパスのスロープをのぼった一角で、静かに光を反射する水面…。

1924年、本学水泳部の高石勝男選手(商学部)が、
第8回オリンピック・パリ大会の水泳男子100mおよび1,500m自由形で5位に入賞。

800mリレーでも4位に。日本に、オリンピック初入賞をもたらしました。

翌1924年、その活躍を顕彰して建設され、
高田早苗総長の命名により開場したのが、ここ「高石記念プール」です。

数多くの早大水泳人がここで鍛えられ、世界に名を馳せました。

1965年11月には室内温水プールに、さらに1992年4月に全面改装。
授業以外にも学内一般に開放されており、黙々と泳ぐ学生や教職員の姿が見られます。

CAMPUS NOW

【キャンパス ナウ】2009年7月15日発行 通号187号

※本誌記事を無断で転載等する事を禁じます。

■発行 早稲田大学 広報室広報課©
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104
Tel: 03-3202-5454 e-mail: koho@list.waseda.jp

■制作協力 産業編集センター

※CAMPUS NOWは年5回発行の予定です。次号は、10月下旬発行を予定しています。

【CAMPUS NOW】は WASEDA ON LINE でもご覧になれます。

■日本語版 URL <http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/>

■英語版 URL <http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/dy/>

小誌へのご意見、ご感想を募集しています。左記発行元まで、お寄せください。